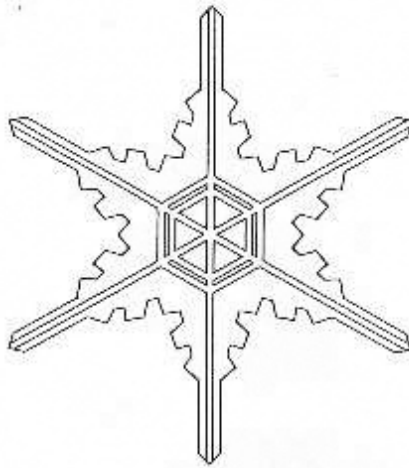


令和3年度
文部科学省事業
地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)

研究開発実施報告書(第3年次)

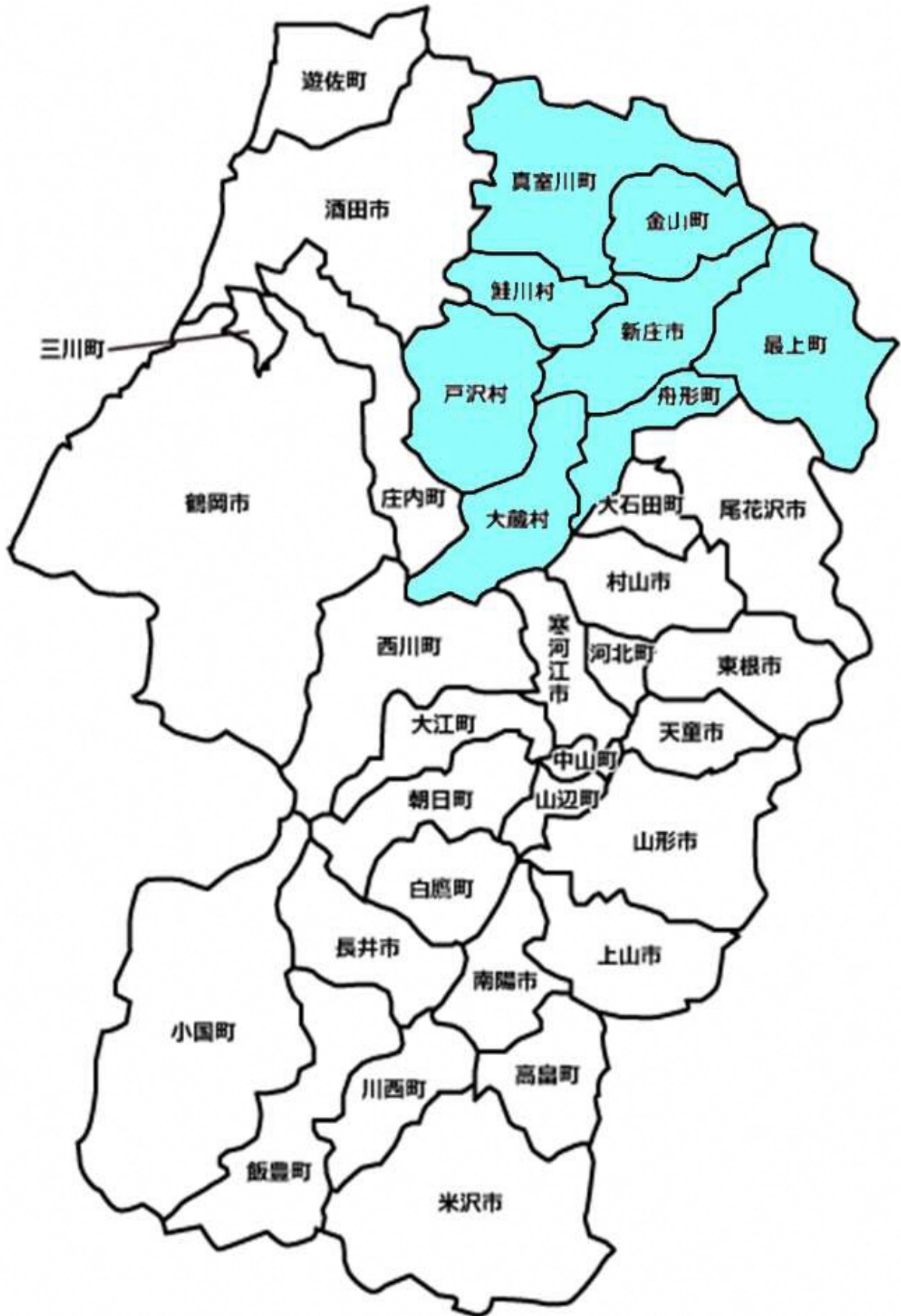
研究開発構想名

『新庄・最上LINKプロジェクト』



山形県立新庄北高等学校

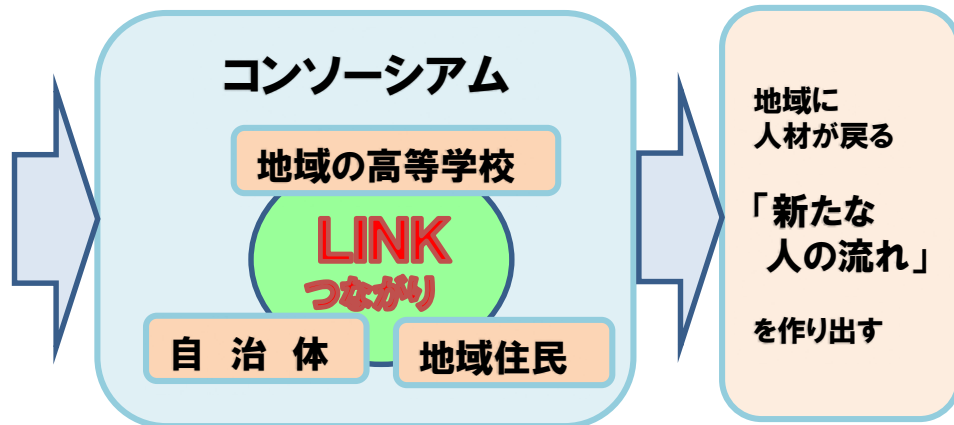
山形県地図及び最上地域の位置



少子化・人口流出など地域の課題の解決に向けて

地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』を育成する

- ①探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材
- ②郷土に対する誇りを持ち、社会や地域とつながる意欲にあふれる人材
- ③Society5.0に変容する地域社会の中でAIやデータの力を最大限活用し展開して地域を牽引していく人材



Local area academic inquiry

A. 地域と密着した探究型学習

- A-a 地域理解プログラム / 最上総合支庁等との連携で地域課題を探究
- A-b 「ジモト大学」プロジェクト / 最上8市町村・県が提供するプログラムを体験
- A-c 地域理解発展研究 / 地域をフィールドにした探究課題にチャレンジ
- A-d 研究発表実践 / 探究型学習の成果を活かした進路実現
- A-e 地域系部活動の設置 / 地域連携のフロントランナーになる意欲的な生徒に探究の場を提供

Information communication technology

B. ICT技術の活用

- B-a 地域連携アプリの開発 / スマホを「振り返り」のe-ポートフォリオ化に活用
- B-b 情報リテラシーの醸成 / ビッグデータ・AIを当たり前のものとして活用できる生徒の育成

New career education

C. 新しいキャリア教育

- C-a アカデミックインターンシップの取組 / 進学校と地元企業との将来につながる情報交換の推進
- C-b 研究実績の進路指導への活用 / 振り返りデータを用いた新しい高大接続の形の模索

Key to success

D. 成功のカギ「教育課程の開発」

- D-a 「ふるさと科目」の開設と教材開発 / 地域情報のインプットによる探究活動の深化と一般教科への還元
- D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」の開設 / 地域での活動(ジモト大学、新庄まつり囃子や山車づくりなど)を単位認定

※研究発表は地域住民等の参加型(ジモトサミット)→地域の総合計画に参画→地域課題解決の経験・地域を牽引する人材の育成

地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』

(1) 「郷土愛を持ち、主体性と協調性を発揮する人材」

- ★郷土の歴史、文化、そこに生きる人々に興味を持ち、主体的に探究する能力
- ★地域や住民の課題に対して当事者意識をもって自ら積極的に行動し、仲間と協調しながら行動できる能力
- ★有用感、自己肯定感を持ち、ポジティブに向上心を持って学ぶ能力



(2) 「コミュニケーション力とリーダーシップを兼ね備えた人材」

- ★課題発見のための情報収集及び分析能力
- ★解決のためのデザイン思考、仲間とのコミュニケーションやチームビルディング能力
- ★困難に対してもリーダーシップを発揮し、果敢にチャレンジする能力



(3) 「経済を支え、働く場を創れる人材」

- ★地域経済を知り、お金の循環等、経済的な視点から考えられる思考能力
- ★地域におけるICT等の活用など、多様な働き方を可能とする起業家精神と能力



はしがき

2018（平成 30）年、文部科学省は Society 5.0 の社会を地域から分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、「経済財政運営と改革の基本方針 2018（2018 年 6 月 15 日閣議決定）」や「まち・ひと・しごと創生基本方針 2018（2018 年 6 月 15 日閣議決定）」に基づき、高等学校が自治体・高等教育機関・産業界等との協働によりコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進する「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実践校を募集した。

学校と地域社会との連携が促された 2016（平成 28）年の中央教育審議会答申に先駆け、山形県立新庄北高等学校では 2014（平成 26）年度から地域を学びの場とする「地域理解プログラム」に取り組んできた。この取組に対しては地域の理解と協力を得ることができ、現在では学校外に多くの協力組織・機関・人材が存在している。

2018（平成 30）年度、本校では普通科探究コースが設立され、本校独自の探究的な学びづくりとその中で得た力を生徒たちが発揮できる場を確保する新たな教育課程の編成が求められるようになっていた。こうした時に公示された文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」が育成しようとする生徒像は本校が育成を目指す生徒像と合致し、既に学校外に形成されている協力組織・機関・人材はコンソーシアムとして容易に運用できる状態となっていた。本校の願いと現状に合致する事業だったのである。

2019（令和元）年度、本校は文部科学省の助言と支援を受けつつ、少子化・高齢化・財政難と幾多の課題を抱える山形県新庄・最上地域の活性化に貢献しうる『人財』の育成を目指し、事業名を「新庄・最上LINKプロジェクト」と名付けて実施してきた。本冊子は 3 年間の実施期間の 3 年度の取り組み内容をまとめたものである。

試行錯誤を重ねる中での実践であり、改善点も少なくはないが、本事業を展開する全国の実践校及びこれから同様の実践に取り組もうとする学校の参考となれば幸いである。

令和 4 年 3 月

山形県立新庄北高等学校

新庄・最上LINKプロジェクト 研究報告書

目 次

はしがき

第1部 本事業の概要について……………1

第2部 事業の内容

A 地域と密着した探究型学習の推進

A-a 地域理解プログラム……………17

A-b 「ジモト大学」プロジェクト……………23

A-c 地域理解発展研究……………25

A-d 発表実践……………31

A-e 地域系部活動の設置……………33

B ICT技術の活用

B-a 地域連携アプリの開発……………35

B-b 情報リテラシーの醸成……………35

C 新しいキャリア教育

C-a アカデミックインターンシップの取組……………36

C-b 研究実績の進路指導への活用……………37

D 成功のカギ「教育課程の開発」

D-a 「ふるさと科目」の開設と教材開発……………37

D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」の開設……………38

第3部 生徒の変容と次年度以降に向けて……………43

第1部 本事業の概要について

学級構成

	普通科 一般コース				普通科 探究コース
3年	1組	2組	3組	4組	5組
2年	1組	2組	3組	4組	5組
1年	1組	2組	3組	4組	5組
	定員160名				定員40名

普通科探究コースは、2018（平成 30）年度に設置。

総合的な学習(探究)の時間



〒996-0061 山形県新庄市大字飛田字備前川 61

Tel 0233-22-6022（事務室） 0233-22-6023（全日制職員室）

Fax 0233-22-4961

URL <http://www.shinjokita-h.ed.jp/>

1 事業名

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（新庄・最上LINKプロジェクト）

2 全体計画

- (1) 事業年度 開始年度 平成 31 年度
終了年度 令和 3 年度

(2) 事業目的とその必要性

地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』、すなわち

- ①探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材
- ②郷土に対する誇りを持ち、社会や地域とつながる意欲にあふれる人材
- ③Society5.0 に変容する地域社会の中でA I やデータの力を最大限活用し展開して地域を牽引していく人材

を育成することを目的とする。

また、「学校」の改革を進めるのはもちろんであるが、学校と地域が「LINK」することで、自治体・地域住民の側の地域力を高め、地域外への人材流出が加速していた従来とは逆の『地域に戻る新しい人の流れ』をつくることを最終的な目標としたい。

(3) 事業内容

下記の 4 事業、及び実施に向けた研修会・視察・委員会等。

- L** 地域と密着した探究活動 Local area academic inquiry
探究活動（地域理解プログラム（1 年）、ジモト大学、地域理解発展研究（2 年探究コース）、発表実践（3 年）（系統的な探究型学習）
- I** ICT 技術の活用 Information communication technology
地域連携アプリ開発（ジモト大学への申込・集計・振返をスマートフォンで）
- N** 新しいキャリア教育 New carrer education
アカデミックインターンシップ（地元企業等との交流）
研究実績の進路指導への活用（総合選抜型・学校推薦型選抜、ポートフォリオ等）
- K** 成功のカギ「教育課程の開発」 Key to success
学校設定科目「My エリアラーニング」「ふるさと探究」の設置

3 山形県立新庄北高等学校と地域の現状

山形県立新庄北高等学校は 1900（明治 33）年に創設された山形県新庄・最上地域の伝統校・基幹校である。2020（令和 2）年に創立 120 周年を迎えたが、創立以来、一貫してリーダーの育成をその使命としており、地域の期待を担って幾多の人材を輩出してきた。2014（平成 26）年度には進学型単位制及び同校最上校とのキャンパス制を導入、2018（平成 30）年度には普通科探究コースを新たに設置するなど、山形県が推進している探究型学習の推進においても先導役となっている。2016（平成 28）年から 2018（平成 30）年度の卒業生の進路先では、国公立大学を中心に 80%を超える生徒が四年制大学に進学している。

本校が位置する山形県最上地域は、山形県北東部の内陸部にあり、1 市 4 町 3 村（新庄市・金山町・最上町・舟形町・真室川町・大蔵村・鮭川村・戸沢村）から構成されている。新庄盆地を中心に

周囲を高く険しい山々に囲まれ、総面積の 8 割を森林が占めている。また、地域全体が「豪雪地帯対策特別措置法」による特別豪雪地帯に指定されている。

「平成 27 年国勢調査」によると、産業構造については県平均に比べ第一次産業の従事者割合が高く、市を除く町村全てが県平均を上回っている。

最上地域の人口については 1955（昭和 30）年の 128,597 人をピークに減少が続いており、近年その減少幅が大きくなっている。平成 27 年国勢調査では 2010（平成 22）年調査に比べ、全国では 0.8%減少、山形県では 3.9%減少しているが、当該地域では 7.6%減少し、県の約 2 倍の人口減少率となっており地域の維持そのものが困難になりつつある。出生率については 2016（平成 28）年人口動態調査では 477 人であり 5 年前との比較では 64 人（11.8%）の減少となっている。高齢化率も県内平均の 32.3%を超え、34.5%となっている。こうした影響を受け、新庄・最上地域の 8 市町村のうち 6 町村が、「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されており、地元産業の衰退は、若者をはじめ求職者の雇用創出の道を閉ざし、ますます地域社会の活力を奪っている。

このような地域の現状を鑑み、本校で行ってきた指導は地域のためになっているのかという反省が常にあった。新庄・最上地域には大学・短期大学が立地しておらず、進学する生徒は自ずと地域外に出ることになる。高校卒業の現状では、2018（平成 30）年度学校基本調査によると 2017（平成 29）年度最上地域出身の卒業生 713 人のうち、進学は 487 人（68.3%、就職は 222 人（31.1%）となっており、進学者と県外就職者を合わせると実に 541 人（75.9%）もの生徒が高校卒業と同時に地域外に出ている。また就職に関しては、県内就職率は県平均より約 10 ポイント低い状態で推移している。2015（平成 27）年度に実施した高校 2 年生対象のアンケート（n=417）においては、「地元で働きたいと思う企業があるか」との問いに対して、「ない」または「分からない」と回答した割合は 61%となっており、地元企業に魅力を感じていない、又は知らないなど、生徒に対して地元で働く場所などの必要な情報が届いていないことがわかっている。

こうした現状を背景に、本校では 2014（平成 26）年度から 1 年次の総合的な学習の時間において「地域理解プログラム」を開講している。このプログラムはキャリア教育の一環として、総合的な学習の時間において、地域課題に係る探究活動を行い、生徒の将来を展望させるものである。

この趣旨については、地域からも共感する組織がすぐに現れ、2016（平成 28）年度からは最上地域政策研究所（新庄・最上地域の 8 市町村が共通する地域課題に共同で対処する目的で設置された組織）が、「地域産業を支える人材の育成・確保」の視点から本プログラムに参画、2017（平成 29）年度には「もがみ地域理解プログラム運営委員会」を発足させ、本プログラムの対象を新庄・最上の高校全体に拡大させた。このプログラムの重要性は新庄・最上地域の 8 市町村に共有されており、2017（平成 29）年度には各市町村からプログラムを持ち寄った「SHINJO・MOGAMI ジモト大学」プロジェクトがスタートしている。

現在は、新庄・最上地域の 8 市町村・最上総合支庁（最上地域政策研究所の上部組織）・東北芸術工科大学・最上教育事務所・地域の高校等で 2018（平成 30）年度に「新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアム」を構築、本校の「地域理解プログラム」からスタートした高校と地域の連携が課題として地域の自治体等に共有されることとなった。



仮説C「新しいキャリア教育」に係る仮説

- ① 地元企業との連携を強化したキャリア教育により、上級学校卒業後に地域に戻りたいと考える生徒の割合が増加する。
- ② ポートフォリオを活用することで地域における探究活動を活用して進学する生徒の割合が増加する。

仮説D「教育課程の開発」に係る仮説

- ① 地域の題材を扱った授業を受けることで、総合的な学習の時間における探究型学習をより内容の濃いものにできる。教科横断的な科目を受講することで地域の現状や課題を広い視点で捉えることができるようになる。
- ② 地域の題材に関する調査研究を行うことで、教員自身の地域に対する愛着が強くなる。調査研究を通して教員の指導力が向上する。
- ③ 学校外における学修として単位認定することで、地域における活動を活性化できる。

②研究開発の概要

A 地域と密着した探究型学習の推進

地域と密着した探究型学習を通して、地域課題を発見解決に導くプロセスの経験を積ませることで、地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』を育成する。本校では平成26年度より1年次生全員に年間を通じた地域理解のための探究型学習「地域理解プログラム」を行っている。「地域理解プログラム」の実施により、教職員側の意識も変化し、生徒が地域連携に関わり、課題解決能力の伸長に向けた素地はできている。これを土台にした「地域理解発展研究」(2年次)、「発表実践」(3年次)を開設し、3年間を通じた探究型学習を体系的に行う。

A-a 地域理解プログラム

1年次生全員が履修。深い思考力、まとめる力、プレゼンテーションスキルなど探究型学習の基礎となるトレーニングを積んだ後に、地域課題について課題研究・プレゼンテーションを実施する。

A-b 「ジモト大学」プロジェクト

1年次の生徒が全員受講。コンソーシアムの構成員である県や地域の市町村が、高校生を対象にした、地域課題を体験できる講座を提供。

A-c 地域理解発展研究

2年次で履修。1年次の「地域理解プログラム」を土台に、より実際の地域社会における課題解決に近い形での探究型学習を行う。生徒が個々にテーマ設定し、外部での調査・連携を主体とすることで、地域と生徒がより密に関わる。

A-d 発表実践

3年次では、1・2年次で探究してきた研究内容をもとに、自身の進路決定につなげる「専門分野における研究発表」をテーマとする(事業2年目より実施)。

A-e 地域系部活動の設置

地域連携のフロントランナーとして新たなテーマを切り開き、より深い探究の機会を提供するために、核となる生徒による地域系部活動「地域探究部」の活動を継続する。

B ICT技術の活用

ICT技術を地域における探究活動に活用する経験を積ませることで、Society5.0に変容する地域社会の中でAIやデータの力を最大限活用し展開して、地域を牽引することのできる『人財』を育成する。

B-a 地域連携アプリの開発

地元企業と連携して地域連携活動専用のスマートフォンアプリを開発し、「ジモト大学」において県や各市町村が提供する地域連携の取組みへの参加をより簡便にすることで、地域活動の活性化を図る。また、参加後の振り返りをスマートフォンで入力可能とすることで生徒の意識向上や活動の蓄積に加え、連携する大学との間で生徒が入力記録したポートフォリオを直接利用する新しい入学者選抜の研究を実施する。

B-b 情報リテラシーの醸成

ICT技術は、過疎が進む地域においても、都市圏と同等に競い合い豊かな社会を創造するための、そして技術革新や価値創造の源となる飛躍的知を発見・創造していくためのキーテクノロジーとなる。AIやデータの力を最大限活用して展開し、地域を牽引することのできる人材を育成することを目指す。タブレット等のさらなる整備を行い、探究活動を実施しながらいつでもデータを活用できる環境を整える。特に地域における探究活動の多い「地域理解発展研究（2年次）」や「地域理解プログラム（1年次）」においては、取材時に生徒がタブレットを持って調査・記録しながら活動することのできる環境を整える。

C 新しいキャリア教育

C-a アカデミックインターンシップの取組

本校がその特性を生かしながら学校独自に作成し実施している「キャリア教育実践プログラム」を見直し、「企業訪問」「企業説明会」や「医療看護系体験」等の内容を発展拡充させ「アカデミックインターンシップ」として新たに展開する。生産・科学技術で優れた実践や技能を持つ地域企業の「企業説明会」などを企画し、地域全体での『人財』の育成に繋げ、大学の先の将来の展望を見据え、地域の企業に目を向けさせる。

C-b 研究実績の進路指導への活用

連携する大正大学・東北芸術工科大学とは、単純な総合型選抜・学校推薦型選抜入試から一歩進めて「B-b 地域連携アプリの開発」で生徒自らが入力記録したポートフォリオを直接活用する入学者選抜の新しい形を探る。具体的には、これらの取組みを拡大することで、従来の入試制度とは異なる高大接続の方法を探る。

D 成功のカギ「教育課程の開発」

進学を主とする学校における地域連携の教育課程モデルを編成し、地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』を育成する。

D-a 「ふるさと科目」の開設と教材開発(2年目より実施)

探究型学習に深さを与えるために、地域の情報をインプットする学校設定科目「ふるさと探究I」（1年次）を新たに開設する。各教科担当者が学習指導要領の科目を土台として、地域を題材とした指導を行う。

D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」(1～2単位)の開設

「ジモト大学」プロジェクト、「ユネスコ無形文化遺産新庄まつり」などの地域活動を、学校外における学修として単位認定する学校設定科目「Myエリア・ラーニング」を新たに開設し、教育課程上に位置付け、より積極的な活動に繋げる。

類型毎の趣旨に応じた取組内容

(1) ジモト大学フォーラムの実施

本校の実践を地域の各高等学校に拡大し、さらに地域住民の声も聞くことのできる場として「ジモト大学フォーラム」を開催する。成果発表会においても審査員として地元住民を招くなど、地域住民を巻き込んだ活動にしていく。平成31～令和3年度に総合振興計画を策定する市町村については総合計画や教育大綱に提言を盛り込む(8市町村はコンソーシアムの構成メンバーであり可能)。自分たちの取組が地域社会の変化に繋がる経験は高校生を大きく成長させ地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人材』の育成に寄与する。

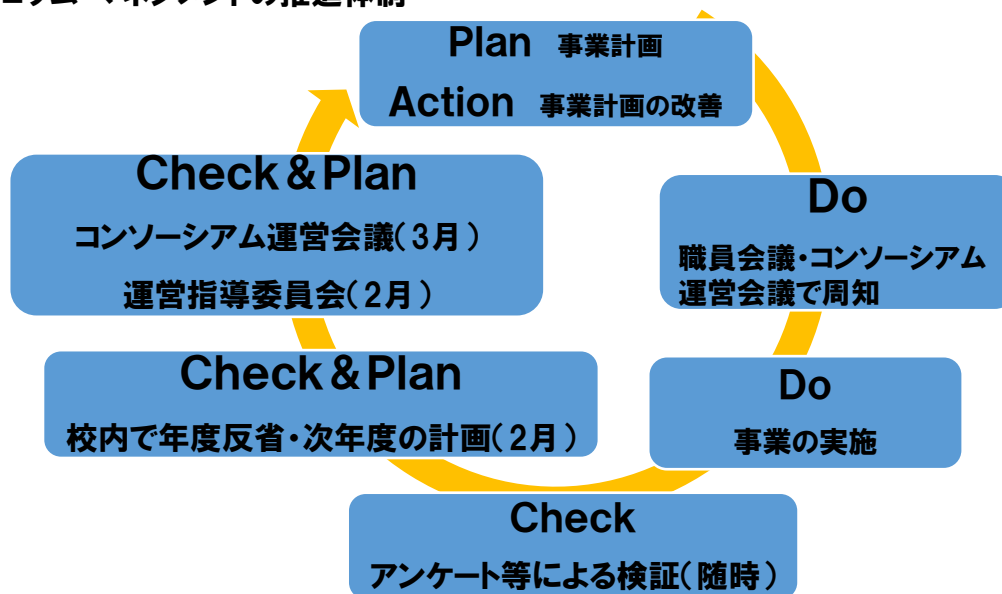
(2) 全国の地域連携校同士の交流

共通の地域課題の解決に向けた取組を行う。共同テーマで研究に取り組み、他校との活動のネットワークを構築・拡大する。

(3) 地域への研究成果の普及

コンソーシアム内に高等学校部会を設置して、地域の高等学校で研究内容を共有する。また、県内の地域連携を実施している学校と情報交換の場を設ける。

5 カリキュラム・マネジメントの推進体制



事業毎・学校単位・コンソーシアム単位のカリキュラム・マネジメントを重層的に実施。

- ・プロジェクトチーム単位のマネジメント→運営企画委員会に向けて毎月実施
- ・学校単位のマネジメント→運営指導委員会に向けて年2～3回実施
- ・コンソーシアム単位のマネジメント→年1回実施

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名	機関名	機関の代表者名
山形県教育委員会	教育長 菅間 裕晃	山形県立新庄北高等学校	校長 高橋 剛文
山形県最上総合支庁	支庁長 須藤勇司(代表機関)	山形県立新庄南高等学校	校長 高橋 たず子
新庄市	市長 山尾 順紀	山形県立新庄神室産業高等学校	校長 後藤 義昭
金山町	町長 佐藤 英司	新庄東高等学校	校長 田宮 邦彦
最上町	町長 高橋 重美	東北芸術工科大学	学長 中山 ダイスケ
真室川町	町長 新田 隆治	最上教育事務所	所長 永井 康博
舟形町	町長 森 富広	一般社団法人とらいあ	理事長 本澤 昌紀
大蔵村	村長 加藤 正美	新庄商工会議所	会頭 柿崎 力治朗
鮭川村	村長 元木 洋介	もがみ北部商工会	会長 高橋 智之
戸沢村	村長 渡部 秀勝	もがみ南部商工会	会長 佐藤 隆
尾花沢市	市長 菅根 光雄		

(2) 将来の地域ビジョン・求める人材等の共有方法

本事業における将来の地域ビジョン・求める人材像は、そもそも「新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアム」の母体となる「もがみ地域理解プログラム運営会議」において、地域が生き残るために、地域に生きる私たちは「どんな人材を育成しなければならないのか」をコンソーシアムを構成する機関の職員と一緒に検討したものである。このときにメンバーから出されたのが、地域の要求する次の3つの人材像である。

- ・コミュニケーション力のあるリーダーの人材育成（ビジョンを持ち課題発見解決できる人材）
- ・郷土愛を持ち主体性と程よい協調性を発揮する人材（自己肯定、ポジティブな人材）
- ・経済を支え、働く場を創れる人材（仕事をつくる、多様な生き方を創造できる人材）

これに応え、将来地域を牽引する力を持つ人材を育成するため、本校として具体的な目的を定めた。すなわち、地域の自治体（8市町村及び山形県）・企業・活動団体そして地域住民等と連携し、

- ①探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材
- ②郷土に対する誇りを持ち、社会や地域とつながる意欲にあふれる人材
- ③Society5.0に変容する地域社会の中でAIやデータの力を最大限活用し展開して地域を牽引していく人材

総称して、**地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』**を育成することを目的とする。

また、「学校」の改革を進めるのはもちろんであるが、学校と地域が「LINK」し（つながり）、自治体・地域住民の側の地域力を高め、地域外への人材流出が加速化していた従来とは逆の『地域に戻る新しい人の流れ』をつくることを最終的な目的としたい。

(3) コンソーシアムにおける研究開発体制

「新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアム」開設後も、母体となった「もがみ地域理解プログラム運営委員会」を残して、高校における諸事業への支援のためのプロジェクトチームを編成する。

現段階では「A-a 地域理解プログラム」及び「A-b「ジモト大学」プロジェクト」（詳細は第2部）を中心とした取り組みになっているが、支援事業を随時増やしていく（A-c、A-d、A-e をスタートに必要なに応じてチームを増やす予定）。

(4) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

① カリキュラム開発等専門家

役 職	氏 名	備考
カリキュラム開発等専門家	牛木 力	東北芸術工科大学 ご自身の研究室の活動でも定期的に新庄市を訪れており、学生ともども来校している。
カリキュラム開発等専門家	浦崎 太郎	大正大学 運営指導委員を兼ねる。年 2~3 回来校。メール、Web 会議システムで随時指導をいただいている。
カリキュラム開発等専門家	岡崎 エミ	東北芸術工科大学 運営指導委員を兼ねる。メール、Web 会議システムで随時指導をいただいている。

② 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和 3 年 5 月 14 日	・浦崎太郎氏(Web 会議システム) 探究活動の主幹の探究推進課員と打合、指導、助言
令和 3 年 5 月 21 日	・浦崎太郎氏(Web 会議システム) 職員向けの研修会
令和 3 年 7 月 5 日	・岡崎エミ氏、牛木力氏(Web 会議システム) 本校 1 年次生へ地域探究活動の講義について 探究活動の主幹の探究推進課員と打合、指導、助言
令和 3 年 11 月 8 日	・浦崎太郎氏 探究活動の主幹の探究推進課員と打合、指導、助言
令和 3 年 11 月 20 日	・牛木力氏(Web 会議システム) 地域探究部生徒に指導、助言 探究活動の主幹の探究推進課員と打合、指導、助言
令和 3 年 12 月 14 日	・牛木力氏(Web 会議システム) 地域探究部生徒に指導、助言 探究活動の主幹の探究推進課員と打合、指導、助言
令和 3 年 12 月 21 日	・浦崎太郎氏 職員向けの研修会
令和 4 年 1 月 23 日	・岡崎エミ氏(Web 会議システム) ジモト大学フォーラム（オンライン開催）に出席 講演、地元住民との対話
令和 4 年 2 月 21 日	・浦崎太郎氏 職員向けの研修会

(5) 地域協働学習実施支援員について

現在はコンソーシアムの所属する市町村の予算を出し合って「一般社団法人とらいあ」が地域協働学習実施支援員としての役割を担っている。

① 地域協働学習実施支援員

役 職	氏 名	備 考
地域協働学習実施支援員	高山 恵美子	一般社団法人とらいあ副理事長 ジモト大学事務局
地域協働学習実施支援員	小泉 篤	山形県最上総合支庁連携支援室
地域協働学習実施支援員	坂本 健太郎	山形県最上総合支庁観光振興課

② 実施日程・実施内容

日程	内容
ジモト大学準備期間 (4～5月)	高山恵美子氏 ・週2～3回 ジモト大学の準備・調整等
ジモト大学開講期間 開講前調整期間 (6～10月)	高山恵美子氏 ・週3～5回 ジモト大学開講先との連絡調整等 ※業務として委託しているため、勤務は不定期

※小泉篤氏・坂本健太郎氏は担当の県職員のため、企画・調整において随時連携。

(6) 運営指導委員会について

① 運営指導委員

氏名	所属・職	備考
浦崎 太郎	大正大学・教授	カリキュラム開発等専門家
岡崎 エミ	東北芸術工科大学・コミュニティデザイン学科長	カリキュラム開発等専門家
小泉 篤	最上総合支庁連携支援室・室長	コンソーシアム代表
庄司 正人	(株)山形メタル・代表取締役	地域の企業代表
澁江 学美	新庄市立新庄中学校・校長	地域の中学校代表
後藤 義昭	山形県立新庄神室産業高等学校・校長	地域の高校代表
菅間 裕晃	山形県教育庁高校教育課・課長	管理機関

② 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和4年2月3日	運営指導委員会※ ・3年間の事業総括 ・次年度の取り組み

※事業の成果発表会を兼ねて実施。新型コロナウイルス感染症予防のため、録画した発表をご覧になって後日指導、助言をいただいた。

(7) 研究成果報告・事業成果の検証に向けた計画

① カリキュラム・マネジメントにおける検証

事業の改善をリアルタイムに行うために、事業毎・学校単位・コンソーシアム単位のカリキュラム・マネジメントを重層的に実施する。

ア. プロジェクトチーム単位のマネジメント → 運営企画委員会に向けて毎月実施

イ. 学校単位のマネジメント → 運営企画委員会に向けて年2~3回実施

ウ. コンソーシアム単位のマネジメント → 年1回実施

このため、次のようなものなどを資料として活用する。

・個々の取組におけるアンケート、学習レポート等

生徒（ワークシート形式による自己評価やアンケート）、教員（意識変化のアンケート）

保護者・連携先教員・外部（成果発表会等におけるアンケート調査）

指標による評価（本事業における「研究開発の具体的指標」等）、成果物による評価 等

・運営指導委員による評価、カリキュラム開発専門家の指導、運営企画委員会における意見

・既存の本校独自調査...生徒による授業評価アンケート、探究活動前後の生徒アンケート、生徒・保護者の学校評価アンケート、学校評議員による評価及び学校自己評価

② 三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）の高校魅力化評価システムの活用

客観的な評価・他校との比較検証を行うために交流のある三菱UFJリサーチ&コンサルティングの「高校魅力化評価システム」を利用した検証を行う。地域力の向上に向けても、先進事例を参考にしたプログラム作成の協力をいただく。

③ 事業報告

毎年事業報告会を実施、事業報告書を発行。また、実施内容については全国での地域連携シンポジウム等で発表しており、今後も継続して行う。

(8) 管理機関における取組について

① 管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・本事業の柱となるジモト大学プロジェクトには県及び市町村の予算が投入されており、コンソーシアムが主体となる取組である。令和3年度は新たに隣接地域の尾花沢市も加わり、オンライン講座を中心にして継続している。講座数、受け入れ態勢、学びの質の確保を目指し、講座の勉強会、地域住民向けの発表会を含むフォーラムを開催している。さらに講座の提供主体となる外部人材の拡大等を図り、さらに小中学校とも連携を検討している。

参考：ジモト大学の講座数、参加延人数の推移

	2017	2018	2019	2020	2021
講座数	12	21	32	32	36
参加延人数 ^[注]	244	418	540	587	908

[注] 本校以外の高校生も含む。

② 事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・コンソーシアムには、既に県及び市町村の予算が投入されているが、令和2年度より各市町村からの支出は40万円に増額した（令和元年度は20万円）。また今年度からは尾花沢市も参加している。このことにより、地域協働学習実施支援員（一般社団法人とらいあ高山恵美子氏）と共に事業を拡大することが可能である。
 - ・カリキュラム開発等専門員、その他の地域協働学習実施専門員は事業の始まる前から支援をいただいていた方であり継続した対応が可能（コンソーシアム予算の活用も可）。
- ③ 高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について
- ・県や市町村、高等学校、商工会等がコンソーシアムのメンバーとなっているため、コンソーシアムの規約を通して、ジモト大学のプログラム提供者や自治体の各部署との協働が図られている。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和3年4月1日～令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A-a 地域理解プログラム 地域課題に係る探究型学習の時数	4	3	3	1	—	2	2	3	1	2	3	—
A-b 「ジモト大学」プロジェクト 開講講座数	—	—	—	2	9	10	16	9	2	2	—	—
A-c 地域理解発展研究 地域課題に係る探究型学習の時数	6	5	6	5	1	7	8	6	7	—	—	—
A-d 発表実践	2	2	2	2	—	2	1	—	—	—	—	—
A-e 地域系部活動（地域探究部）	週2～3回の活動											
B-a 地域連携アプリの開発	運用しながら改定											
C-a アカデミックインターンシップ	連携先との連絡・調整		7/28									
D-a 「ふるさと科目」の開発と教材開発				1	3	7	4	7	3	5	3	
D-b 「Myエリア・ラーニング」の開設											次年度の準備	
ジモト大学フォーラムの実施	内容の準備、ファシリ研修2回								1/23			
運営指導会議											2/3	

(2) 実績の説明

○研究開発の内容や地域課題研究の内容について

- ・新型コロナウイルス感染症による影響（以下、コロナ禍）は昨年度ほどではなく、ほぼ計画通りに実施できた。
- ・次年度への業務の接続にも留意し、2年続けたプロジェクトチーム体制から既存の分掌の中へ業務を移行した。授業についても、指導案を作る教員や授業での主担当などの役割分担をより明確化し、事業が終わっても持続がなされるように工夫した。
- ・以下、各事業については大きな特徴に絞って記載し、詳細は第2部以降に述べる。

A-a 地域理解プログラム

課題解決型から地域の可能性発見型に移行して3年目を迎えた。地域協働学習支援員からは「発

表は過去と比べて発想が豊かになっている。紋切型のものから自分ごとになっている」「高校生が地域に出やすいように、今後も協力したい。生徒の真摯なまなざしに、大人も影響され、呼応していく」などの評価を頂いた。また成果発表会は感染症予防のためポスターセッション形式から生徒による動画撮影・編集形式に変更することになったが、教員側が想定している以上に生徒のICTスキルが向上していることが伺えた。校内の好きな場所を探して撮影を行い、撮り方、編集など、各班様々工夫を凝らしていた。アイデアも多様であり、発表を動画に撮影することで自分たちの発表を客観的に振り返ることも可能になるなど、結果として新しい形の学びの機会を提供することになった。

A-c 地域理解発展研究

「動く」ことを積極的に呼びかけ、昨年度よりもフィールドワークの行き先の多様化や、オンラインを活用して地域の方と接する機会の増加が見られた。

A-e 地域探究部

今年度から個人研究も開始し、生徒が興味・関心を持っていることを地域“で”探究する取り組みに移行している。その他、外部の方から依頼を頂くことが増え、ほぼ毎月地域の様々な方と一緒に活動することになった。

月	主な活動
4月～	新庄市からの依頼：「広報しんじょう」のモニター（月1回）
4月～	最上広域市町村圏事務組合及び新庄駅併設施設「ゆめりあ」からの依頼：新設するコワーキングスペースの協働事業
5月	最上総合支庁からの依頼：山菜PRのためのメニュー考案と動画撮影
6月	個人研究開始
7～8月	最上総合支庁からの依頼：地元食材を使ったお弁当メニュー考案と試作
9月	コワーキングスペース調査・会議
10月	一般社団法人とらいあからの依頼：「ゆめりあ」活性化事業として「#まちとしょステーション」の企画運営
12月	山形県探究型学習課題研究発表会
1月	ジモト大学フォーラムに発表者として参加

活動を通して、生徒たちは地域のために活動するたくさんの方々への感謝とともに、「計画を立てることの大切さ」「先を見通して活動すること」「活動が制限されている中でもできることはある」ことを学んだ。

C-a アカデミックインターンシップ

最上総合支庁およびジモト大学と連携して実施できた。昨年度はコロナ禍で大幅に変更しての実施であったが、本来計画していたものに近づいた実施となった。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け(各教科・科目や総合的な学習(探究)の時間、学校設定教科・科目等)

- ・「総合的な探究の時間」においては地域との協働による系統的な指導を確立することができており、「ジモト大学」や部活動での効果も相乗して生徒の意識を変えている。探究活動におい

では、生徒が教員の力を借りずに主体的に外部の方とアポイントメントを取ったり、校外での活動にも自主的に参加したりする生徒が多くなってきた。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

- ・「総合的な探究の時間」における「地域理解プログラム」「地域理解発展研究」「ジモト大学」等の取組は、それ自体が教科横断的な性格を持っているが、令和2年度より開講した「ふるさと探究」はその色合いをさらに濃くした教科・科目となった。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

- ・ジモト大学フォーラム

1月23日にオンラインで開催され、高校生と地域住民36名ずつ（および事務局）が参加した。高校生と住民とがトークテーマに基づいて1対1で対話するトークフォークダンスや、諸団体に活動する高校生の事例発表が行われた。高校生と地域の方が一緒になって地域の未来について語り合う経験は、次代を担う『人財』を育成することに繋がると考えている。

⑤成果の普及方法・実績について

- ・毎年、年度末に研究収録を発行して県内の高校や本事業の指定校等に広く配布することで、取組内容の普及を図っている。また地域内の高校へは、コンソーシアムに高校部会を設置して、定期的に部会を開催している。
- ・地区内の中学校から総合的な学習の時間の授業依頼や、他県の高校から職員研修会の依頼を頂いた。
- ・県外からの視察や新聞社の取材が複数あり、普及に繋がっている。

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

- ・カリキュラム・マネジメントのプロジェクトチームが担当している。
- ・有志の教員で活動の深化を図る「探Qカフェ」や研修会などの実施で有効に機能している。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

- ・令和4年度以降の接続を見据え、プロジェクトチーム体制から分掌の業務へ移行して運用している。教頭が運営企画委員長・運営事務局長として、特定職員に業務が集中しないように随時調整を行っている。

③カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・本事業の柱となるジモト大学プロジェクトはコンソーシアムが運営するものである。「My エリア・ラーニング」が本格導入された際には、ジモト大学の各講座が学外の学修として教育課程の中に位置づけられる。学校側でも振り返りに力を入れることで、学びの蓄積として校内カリキュラムに落とし込むことを目指している。

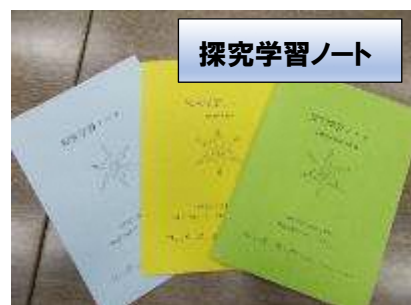
第2部 事業の内容

A-a 地域理解プログラム

「地域理解プログラム」は1年次の総合的な探究の時間において展開されている。前期（夏季休業まで）は探究スキルの習得を目標として、プレゼンテーションやKJ法、メディアリテラシー等に取り組む。後期からは「新庄市でやってみたいこと」を考え、アイデアの実現に向けての方策を探究していく。令和元年度より、以前の「地域課題解決」から「地域の可能性」を見つける活動に方向転換したことで、生徒が身近にあるテーマについて興味を持って探究するようになった。

月	時数	内容
4月	2	探究スキル①②（総探ガイダンス・「私の地域には"これ"がある！」）
	1	探究スキル③（ブレインストーミング・もっとよくするには？）
	1	探究スキル④（KJ法・もっとよくするには？）
5月	2	探究スキル⑤⑥（仮説検証・本当によくなるか？）
	1	探究スキル⑦（仮説検証・よくしてくれる企業を探せ！）
6月	1	探究スキル⑧（仮説検証・よくしてくれる企業を探せ！）
	1	探究スキル⑨（プレゼンテーション）
7月	1	探究スキル⑩（第1サイクル「探究スキル」のまとめ）
	2	地域理解プログラム①②（研究とは）
夏季		地域理解プログラム準備（新庄市の写真撮影）
9月	1	地域理解プログラム③（課題整理① データから見えてきたことは？）
	1	地域理解プログラム④（課題整理② データを使って「やってみたいこと」を考えよう）
10月	1	地域理解プログラム⑤（課題整理③「聞きたい」質問を考えよう／プレゼン準備をしよう）
	3	地域理解プログラム⑥⑦⑧（プレゼンをしよう！インタビューしよう！）
	1	地域理解プログラム⑨（情報収集・アイデア深化①）
11月	2	地域理解プログラム⑩⑪（情報収集・アイデア深化②③）
	1	地域理解プログラム⑫（情報整理① プレゼン準備をしよう）
12月	2	地域理解プログラム⑬⑭（情報整理②③ プレゼン準備をしよう）
	2	2年次 課題研究／地域理解発展研究成果発表会見学
1月	1	地域理解プログラム⑮（プレゼンをしよう！プレゼンを聞こう）
	1	地域理解プログラム⑯（プレゼンの練習をしよう① プレゼン修正）
2月	1	地域理解プログラム⑰（プレゼンの練習をしよう② リハーサル）
	2	地域理解プログラム成果発表会（2／3）⑱⑲
	2	地域理解プログラム⑳㉑（地域理解プログラムを振り返ろう①②）

授業は山形県内の探究科・探究コース設置校に作成が指示されている『探究学習ノート』に沿って進められる。本校の『探究学習ノート』は総合的な探究の時間のテキスト兼ワークシートとなるもので、巻末の評価シートに記入することで生徒は毎時の活動の振り返りもできるようになっている。



【前期(4～7月)】 探究スキルの習得

探究スキルトレーニングの題材にも地域を取り入れている。前期は「課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という探究サイクルの1周目という位置づけである。

① プレゼンテーション・ナンバリング・ラベリング

新庄北高校の総合的な探究の時間の最初の一步として、「私の地域には"これ"がある」をテーマに、ナンバリング・ラベリングを使いながら地域自慢について発表の原稿を作成した。生徒たちは自分たちの地域に関して“他人事”でなく“自分事”として真剣に考えをまとめていた。また、「つけたい力」を意識しながら、プレゼンテーションを班ごと、クラスごとに行い考えを共有した。

② ブレインストーミング・KJ法

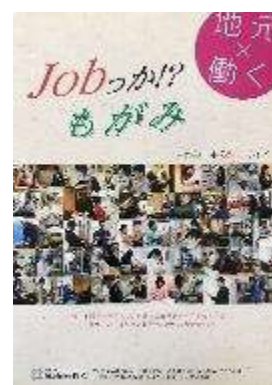
「私の地域にある"これ"をもっとよくするには？」をテーマに、ブレインストーミング・KJ法を使ってアイデア出しを行った。ブレインストーミングの2大原則である「質より量」「自由奔放」を大切にしながら考えを出し合った。また、“これ”(地域自慢)から1つ選び、「よい」を考えるとときの切り口を挙げ、その切り口に従って、アイデアを付箋にどんどん書き、グルーピング・ラベリングを行うことでKJ法を体験した。

③ 仮説検証

「私の地域にある“これ”をよくする方法について、情報収集の続きを行いながら、「自分のアイデアで本当によくなるのか？」をテーマに自分の立てた仮説を検証した。

まず、よくするためのアイデアに対して、根拠となる情報をインターネットで探した。その情報をもとに、自分のアイデアで「よくなる／ならない」を判断し理由をまとめた。インターネットを利用した仮説検証は、情報の偏りや発信源の意図に気をつけるメディアリテラシー(特にメディアを主体的に読み解く能力)も意識した活動である。

次に、最上地域の企業に関する冊子をもとに、「私の地域にある"これ"」を良くしてくれる企業の情報をまとめることで仮説検証を行った。関連が強そうな分野はもちろん、新しいアイデアが生まれることを期待して一見関連がなさそうな分野とのつながりを考察する生徒も見受けられた。



④ プレゼンテーション

「私の地域にある“これ”が「よくなる」自分のアイデアを整理したプレゼンテーションを作成し、班内で発表を行った。質問の大切さを意識させ、お互いにフィードバックを行った。

⑤ 探究スキルの応用

1学期に習得した探究スキルを、「自分の“よくしたいこと”や“課題”」といった身近なテーマで使う活動をおこなった。探究スキルを応用して普段の学習や生活で使えるように意識づけた。

【後期(7～2月)】 地域理解プログラム

「地域の可能性」に着目させることをねらいとして「新庄市でやってみたいこと」を探究した。「地域課題解決」をメインにした活動を行っていた頃は、頭だけで考えた理想論の課題解決策が大半で、「高校生」の姿がない、大人に依存したものであった。しかし現在は、課題解決を含めて「自分たちがやってみたいこと」を考え、「自分達でやれること」「大人に協力してほしいこと」を区別することで、少しずつ地域の中に「自分たち」の関わりを見出すようになってきた。「地域について本気で考えている大人と対等に話ができる」ことを目標にアイデアの深化を図ることで、自分たち「高校生にとって」より住みよい街になるようなアイデアや、地域の大人との関わりが少しずつ増え、学校の授業である「総探」と地域活動との境界が低くなってきたように感じる。今後はアイデアを実行に移すこと、実際に作品を制作することなど、発表に限らないゴールや学習の提示方法を検討することが課題である。

以下は、ここまで述べたねらいに基づき、地域理解プログラム探究サイクルの2、3周目として実践した取り組みを紹介する。

① 地域理解プログラムとは

クラスをまたいで出席番号でグループ分けし、4人から5人の39グループを作った。地域理解プログラムの狙いについて説明後、グループ活動に入った。「新庄市でやってみたいこと」「できること」を最終目標として意識しながら、夏休み前の時点でグループのテーマとして取り組みたいことを個人で付箋に書き出し、KJ法、ディスカッションで考えを共有しテーマを決定した。「新庄市にあるもの」を発見するために、そのテーマに沿って夏季休業中に新庄市内で気になる場所の写真を撮影しておくことを指示し、夏季休業明けの地域理解プログラムの最初の授業でグループ内共有を行うことを伝えた。

② 課題整理

生徒たちは写真データをグループ内で共有し分類・整理する作業に取り組んだ。写真から新庄市内に「ある」ものを分析し、「わかった」ことから「やってみたい」「できる」ことを見出していく活動である。生徒たちの対話が非常に活発であり、付箋に書いた「気づいたこと」・「わかったこと」のデータをKJ法の手法で分類・整理し、ラベリングの手法で「新庄市でやってみたいこと」を明確にすることで、焦点化した対話ができているグループが多かった。しかし、中には焦点化した対話ができなかったグループもあった。その際、「気づいたこと」・「わかったこと」から「新庄市でやってみたいこと」を「地域活性化案」・「困りごとの解消」・「もっとこうできる」・「その他」に細分化して考えてみてはどうかと提案したところ、具体的な話し合いの一助となった。このようにして自分たちが考えたアイデアを、実現に向けて「自分たちでできること」「大人にサポートしてほしいこと」を整理して、プレゼンテーションの準備を行った。



③ プレゼンテーション／インタビュー

10月下旬、コンソーシアムに協力を依頼し、地域の官公庁・企業の方39名を講師として迎え、「地域について本気で考えている大人」と生徒が「対等に話ができる」機会としての「新北版トークフォークダンス」を実施した。生徒たちはここまで考えてきた「新庄市でやってみたいこと」・「新庄市でできること」を提案し、大人は生徒たちの意見に対するアドバイスと自治体や企業としての業務、地域人として取り組んでいることを伝えた。対話は名刺交換・自己紹介1分、講師が自分の仕事について説明4分、生徒が自分たちのプランを説明4分、対話6分の15分1セットを6回行う形式をとった。様々な業種の大人と触れ合うことで生徒は大きな刺激を受け、また高校生のアイデアに触れることで刺激を受けたとおっしゃる講師の方も多く、双方にとって実り多い対話の機会となった。生徒のプランを実現するための協力を提案してくれた地域の方もおり、生徒たちは自分たちのアイデアに確かな「手ごたえ」と「支援者」を得ることができた。



④ 情報収集・アイデア深化

「新北版トークフォークダンス」における地域の方との対話で得られたアドバイスや情報をもとに、探究サイクルの3周目に入った。トークフォークダンスで得られた情報を全て付箋に書き出し、マトリクスにまとめた。作成したマトリクスをもとに各グループの「やってみたいこと」による効果や実現に向けて必要な援助についてフローチャートにまとめた。生徒たちは「対象を絞る」・「範囲を絞る」・「援助の規模」の3つのポイントを意識しながら実現に向けたプランを修正していた。また、修正したプランによって新庄・最上地域に与える影響・変化についても考察させたが、この段階で生徒は自分たちの探究活動が地域発展に寄与する可能性を実感し始め、グループ内での対話が一層活発なものとなっていった。

次に、グループ外の意見も集めるべく、自分たちのプランをまとめた用紙を教室前の廊下に掲示し、用紙を見た人が付箋にコメントを書き込めるようにした。次回の「情報整理」において、グループ外の第三者的意見から活用できそうなものを取り入れさせるためである。



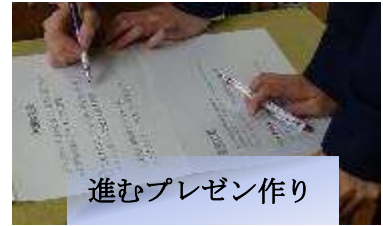
⑤ 情報整理

プレゼンテーションに向けての準備である。一次発表会のプレゼンテーションは6枚の紙芝居による紙芝居プレゼンテーション（以下K P法）で行わせ、その構成は以下の通りである。

- 1枚目：グループ番号・グループメンバーの名前・発表タイトル
- 2枚目：写真を撮ってわかったこと、自分たちのやってみたいこと「Ver.1」
- 3枚目：大人の方々からいただいたアドバイス
- 4枚目：自分たちのやりたいことをマトリクス（縦軸：独自性、横軸：実現性）でまとめ、よりよいプランにするために絞り込んだ対象や範囲を提示する。

5枚目：自分たちのやってみたいこと「Ver.2」、プランを実行することで期待できる効果ベスト3。
6枚目：自分たちのアイデアを実現するために、自分たちがやること、地域の大人に協力してほしいこと、必要となる条件。

マーカーを使っての紙芝居作成の様子からは、強調したい部分の文字の色・太さ、補足資料として図や写真を用いるなどグループごと、魅力的なプレゼンテーションのポイントを意識した創意工夫が見られた。



⑥ プレゼンテーション

作成したプレゼンテーションをグループ同士で相互評価させ、コメントを参考にしてプレゼンテーションを修正、最終リハーサルに取り組ませた。生徒は発表5分、質疑応答3分、リフレクションシート記入2分の合計10分という構成で練習を行った。成果発表会を目前にした段階になって、生徒から「もっと調べたい」「まだ満足できない」「また一緒に研究したい」という声が聞こえてきた。さらに担当した教職員からも「さらにこの研究を深めさせたい」「計画を実現させたい」との声も上がったことは収穫であった。



12月に2年次の発表を見学した経験から、どのグループも質の高いリハーサルができおり、一度リハーサルした後に相互評価のコメントをもとに改善点をじっくり討議しプレゼンテーションの紙芝居を書き直す班も多く見受けられ、発表会に向けて前向きな様子であった。

⑦ 成果発表会(動画撮影)

2月3日(木)に本校体育館において実施予定であったが、コロナ感染状況が悪化したため、動画で発表を撮影し、来校予定者には後日配信という形となった。動画撮影後は自分達のプレゼンテーション動画を見て振り返りを行った。また他の班のプレゼンテーションも動画で見てリフレクションを行った。動画撮影に変更となってから行ったリハーサルでは、動画撮影の仕方を工夫し、何度も撮り直して良いものを制作しようと前向きに取り組んでいた。また、動画撮影本番では、校内の好きな場所を探して撮影を行い、撮り方、編集など、各班様々工夫を凝らしていた。アイデアも多様であり、各班楽しんで撮影している姿が見受けられ、結果として新しい形の学びの機会を提供する機会となった。

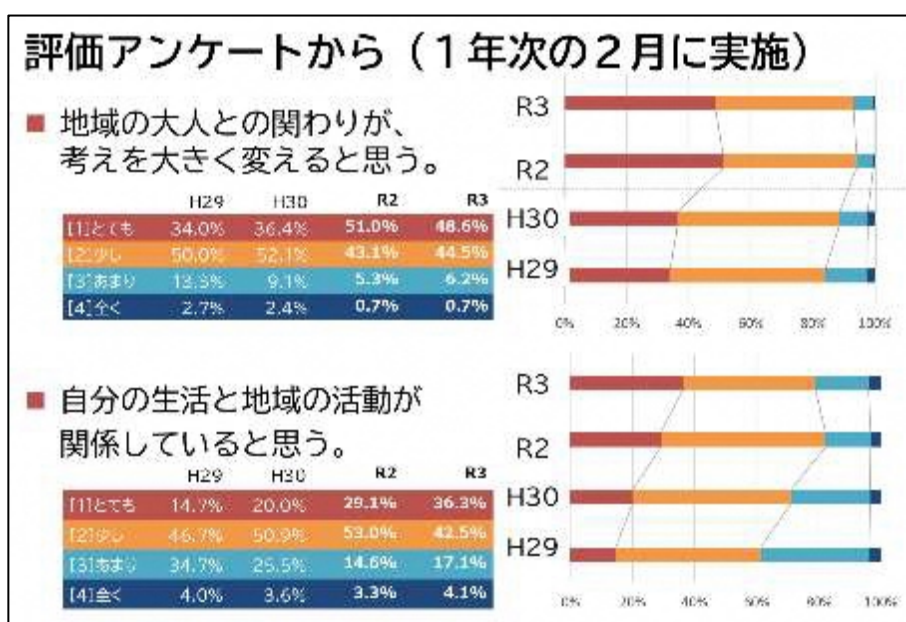


【令和3年度 地域理解プログラム テーマ】

1	ラーメンスタンプラリー	21	地元のFlowerを使ったバスボム
2	ラーメンフェスティバル	22	地域に笑顔を咲かせようProject
3	サマーフェスティバル	23	シャッターアートで市を盛り上げよう
4	新庄祭スタンプラリー	24	伝承野菜・郷土料理マップ
5	新庄市内の飲食店	25	新庄市をもっと快適に！
6	新庄駅付近のマップ・スタンプラリー	26	ラーメンをもっと有名にしたい
7	街のカラフル革命	27	新庄を活気ある憩いの場所へ
8	マンホールと新庄市	28	特産品を販売する自販機の設置
9	かむてん公園にComeCome！	29	安全で全世代の人が集まれる公園
10	ラーメン改革	30	新北生の為のラーメンマップづくり
11	かむてんくん	31	戸澤神社でお宝探し
12	新庄まつりに革命を！	32	公園に行こう
13	コンビニで地域を活性化	33	バリアフリー
14	古民家を活用しよう	34	くじらもち革命
15	映画館を復活させて商店街を活性化させる	35	新庄市体験会
16	地域の高校生と共に新庄市を盛り上げよう！	36	かむてん公園リニューアル
17	マンホールスタンプラリー	37	最上公園の噴水
18	商店街の活性化	38	新北オリジナル自販機を作りたい！
19	新庄市をPRする自販機作り	39	Give&Give
20	空き家を活用		

⑧ 1年間の地域理解プログラム振り返り

地域理解プログラムでの学びを、後輩へのアドバイスをまとめるという形式で振り返りを行った。「テーマを決めるコツは？」、「大人と対等に話すには？」など、トークテーマに沿ってグループ内で話し、考えを共有した後、次年度の1年生に向けて一人一人が後輩に向けてアドバイスを記入した。後輩に伝えるために客観的な記述を意識したことで、自らの学びの記録ともなり、来年度以降の探究活動のヒントともなるものとなった。さらに、生徒が地域理解プログラムを通して得た力を記述することによって、1年間であつた力を生徒自身が振り返り把握することにつながった。



A-b 「ジモト大学」プロジェクト

最上8市町村によって構成されるコンソーシアムが主体となって、当該地域の全ての高校生を対象とした体験型の学びを提供するプログラムである。なお令和3年度からは近隣の尾花沢市も加わり、対象となる高校生の範囲が広がっている。高校在学中に1度は参加できるように受け入れ枠を拡大している。講座数や参加生徒数は第1部「本事業の概要について」に記載した。なお、令和3年度の参加延人数908の学年別内訳は次の通りである。



	1年生	2年生	3年生	計
参加延人数	289	506	113	908

過年度は1年生が参加の中心であったが、今年度は2年生の割合が大きくなった。その要因としてはキャリア講座の参加者が多いことや今年度から参加した学校が2年生を対象にしていることが挙げられる。「高校生が旅立つ前に学ぶコト」をテーマに、「各市町村や企業がそれぞれの特性を生かして高校生に地元の魅力を体験できるプログラムを提供する」として始まったプロジェクトであるが、それだけに留まらず生徒のキャリア形成にも影響を与えるものとなっている。

今年度はさらに、次のような発展も見られた。

- ・高校生が企画・運営するプログラムが登場した。
- ・卒業していった大学生が企画・運営するプログラムが登場した。
- ・毎週水曜日の夜、地域の大人の有志によるオンラインの研究会が開かれている。
- ・県内外からの視察やオンライン取材の依頼が複数寄せられた。

このプロジェクトに関わらず、地域の高校生と地域の方々との関わりが以前よりも深まっている様子が伺える。学校外の活動へ参加する生徒が増加し、マスコミでも以前に比べて頻繁に報道されるようになった。

新庄・最上ジモト大学 <https://jimoto-univ.com/>

1月23日(土)午後には新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアムの主催で「高校生とともにある地域・未来フォーラム」がオンライン(Zoom)で開催された。参加者は、高校生36名と地域住民36名(および事務局)である。双方が同数であるのは、第2部で行われたトークフォークダンスのためである。これは高校生と住民とがトークテーマに基づいて1対1で対話するもので、テーマも事前のワークショップで高校生が考えたものである。アイスブレイクの要素も兼ねているため、お互いに話しやすいものが選ばれている。また、進行も高校生が行った。



第3部でも、諸団体で活動する高校生の事例発表が行われた。自分たちの活動に対する大人の方の称賛や他校生徒の発表による刺激など、参加した生徒は充実感と達成感を得ることができたようである。

【会次第】

第1部

講話「高校改革と地方創生～ジモト大学がつむぐ相乗効果～」

東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科 岡崎エミ氏

説明「令和3年度ジモト大学の概要について」

説明者 最上総合支庁総務課連携支援室

第2部 トークフォークダンス

第3部 今年度のジモト大学プログラムや高校生地域での活動の事例紹介（分科会）

- ・新庄北高校地域探究部の1年
- ・最上地域の若者への献血の啓発活動
- ・新庄神室産業高校3年課題研究：本合海小学校での伝承豆交流学习活動
- ・WATS（2期生）の活動
- ・尚綱学院大学ボランティアチーム TASKI の活動
- ・最上で活躍している人を紹介する冊子の作成
- ・北村山高校家庭クラブそばガールズの活動
- ・よりみちくら部の活動
- ・新庄南高校金山校地域探究サークルの活動
- ・新庄北高校1年生の地域探究活動



山形新聞 2022年1月25日

A-c 地域理解発展研究

地域理解発展研究は総合的な探究の時間として本校探究コース 2 年次で履修する。単位数は一般コースよりも 1 単位多い 2 単位となっており、週に 2 回実施されている。

・1 年次「地域理解プログラム」の成果をベースとして地域課題解決策を考察する学びが計画当初のねらいにあったが、令和 3 年度はこれに加えて、生徒の主体性を尊重した

・自分の興味関心をベースとした研究を、地域や住民とつながって進めていく学びにも取り組んでいる。

生徒たちは春季休業の時点からテーマ設定を進め、4 月からはテーマに基づいた先行研究調査に着手する。以下に示すものが今年度の計画である。

月	時数	内容
3 月		地域理解発展研究オリエンテーション
4 月	2	先行研究調査 I
	4	フィールドワーク I 計画・質問づくり・アポイントメント
5 月	2	フィールドワーク I (新庄市内・近隣施設)
	1	先輩から研究アドバイス
	1	研究テーマ再考・決定
	2	先行研究調査結果分析・仮説立案
6 月	2	一次検証方法立案・一次検証
	2	一次検証結果分析・考察
	1	グループ作成
7 月	3	二次検証方法立案 ※夏季休業中に二次検証を実施
	2	3 年探究コース課題研究発表会
8 月	1	二次検証結果分析・考察
9 月	1	二次検証結果分析・考察
	2	一次・二次検証結果まとめ・フィールドワーク II 計画
	2	フィールドワーク II (追加検証) (新庄市内・近隣施設)
	2	追加検証分析
10 月	3	発表準備・論文執筆
	2	フィールドワーク III 計画
	1	リハーサル
	2	地域理解発展研究中間発表会
11 月	2	フィールドワーク III (外部へのプレゼン)
	3	全体考察・再考
12 月	2	発表内容修正・論文執筆
	2	発表内容修正・リハーサル
	3	地域理解発展研究成果発表会
	2	地域理解発展研究の振り返り

全体を大きく 6 つの STEP に分けて活動した。なお各 STEP の最初に、探究推進課長から STEP の趣旨と研究全体の見通しについて説明を行い、ねらいについても繰り返し伝えるようにした。

STEP1 研究テーマ(3月)

はじめに、生徒自身の興味をマンダラチャートを用いて視覚化し、深めていくことで、研究テーマを設定した。先行研究調査においては、書籍やインターネット記事、学術論文をもとに、現在までに明らかになっている点や参考にできる点、新たな研究の切り口を見つけることを目標とした。また、先行研究の有無によって、自分が考えたテーマで研究を進めることができるかどうか、進めるためにはどのように修正すればよいかも同時に考えられるため、テーマ再考の機会ともなった。

STEP2 仮説立案(4月～5月)

調査内容がこの地域にも当てはまることなのかを取材したり、テーマを固めるためのヒントを得たりするためのフィールドワーク I を 5 月に実施した。また上級生である 3 年次探究コースの生徒との合同授業で、お互いに「テーマと、決めつきかけ」を話し、また 2 年次生からは「フィールドワークの内容」、3 年次生からは「昨年度の研究を経てのアドバイス」などについての対話を行った。

STEP3 一次検証結果分析・考察

夏季休業中における本検証（二次検証）がより深い内容になるように、また「事前調査（一次検証）→分析・考察」の流れを一通り体験できるように設定している。検証方法として、生徒には「アンケート・インタビュー・フィールドワーク・実験・ロールプレイ・文献調査・研究室訪問」を示したが、コロナ禍による実施ということもあり、結果よりも「まずやってみることを重視した。

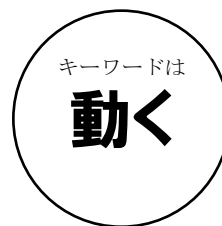


一次検証結果の共有

STEP4 グループ作り～二次検証結果分析・考察

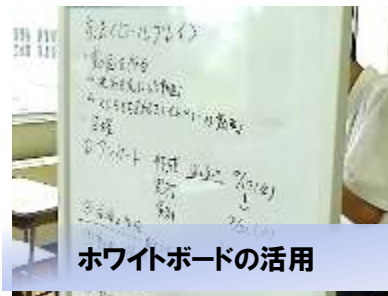
一次検証のテーマが似ている生徒同士で集まり、内容を共有・質疑応答することで、グループ研究を行うか、個人研究を続けるか決定した。グループ研究の班では一次検証の内容を擦り合わせした後、仮説や検証方法を再考し、夏季休業中に二次検証を実施した。

なおこの時期から「動く」をキーワードとして強調した。活動場所を PC 室や多目的教室、図書館などグループで決めてよいことにした上、毎回授業を開始する場所と終了する場所を別にすることで、強制的に動くような仕掛けを作った。





それぞれの場所で活動



ホワイトボードの活用

夏季休業中にフィールドワークを希望するグループが過年度に比べて増加し、近隣の中学3年生と「夏の勉強会」を開くなど校外に出て具体的な活動をする生徒も見られた。また近隣の市町村だけではなく山形市（電車で40分程度）にまでインタビューに赴くグループも複数あり、生徒の活動の幅の広がりを感じられた。

一次検証・二次検証の結果を合わせて分析・考察した後、追加検証としてフィールドワークⅡを実施した。地域の方や行政機関、企業、施設を訪問し、見学やインタビュー調査を行った生徒や、二次検証の結果をもとに改めて市内を散策した生徒もいた。中には本校生徒用に資料を作ってくれたり、逆に生徒が取材を受けたり、また地域にあるNPO団体と協働したりと、地域が本校の教育活動に理解を示してくれていることが実感できた。



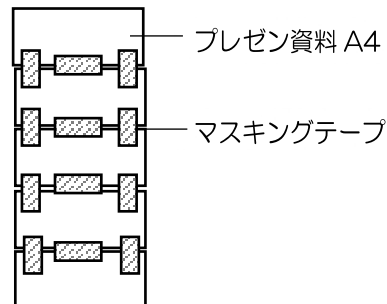
山形新聞 2021年8月3日

STEP5 中間発表会

中間発表会はポスターセッション形式で行った。まずプレゼンテーションソフトを使ってスライドを作成し、A4用紙10枚にまとめる。印刷物を右図のようにマスキングテープで貼りつける簡易ポスターを今年度も採用した。

リハーサルにおいて、中間発表会と同様にパーティションホワイトボードや指示棒を使用することによって、生徒の練習意欲が高まっているように感じた。また、発表会当日もパーティションホワイトボードの使用により、準備の負担も大幅に軽減された。

※簡易ポスター（裏側）



模造紙に直接印刷することもできますが、修正のたびに印刷し直しになるため、スライドごとに印刷して発表に使うようにしています。

中間発表会では、実際に発表し、聴衆からフィードバックをもらうことで、主張の矛盾点や説明が伝わりにくい内容、得られたデータ処理の仕方など、研究全体の一貫性に関する多くの改善点に気づくことができた。また、聴衆に向けた発表態度やスライドの見やすさなど、プレゼンテーションの質を改善させる必要性にも気づくことができた。

この段階で完成度の高い研究であった「あの揺れと爆発。最上で起こっていたらあなたは」、「【作ってみた】地域 PR ソングはバズるのか？」の 2 研究を 12 月に開催される山形県探究型学習課題研究発表会に応募した。

また中間発表会は校内の人間を対象とした発表であったため、地域の方や専門家からのフィードバックを得ることを目的に、フィールドワークⅢとして地域の方へのプレゼンテーションを実施した。研究テーマと協力いただいた方々を以下に紹介する。

	研究テーマ	訪問先
1	伝承野菜を PR しよう	新庄くらプリン
2	新庄市の投票率を向上させるためには	選挙管理委員会
3	新庄生は方言を使わねなが？	民話の会
4	新庄市に住む人の読書量は増やせるか	新庄市立図書館
5	夢を乗せる新庄鉄道～もう一度、新庄市を輝かせるために～	最上市町村圏事務組合
6	城が与える街への影響～新庄城から考える～	新庄市役所総合政策課、農林課
7	とびだせ新庄～中学生と交流してみた！～	雪の里情報館
8	幼い頃の生活は将来犯罪を犯す要素となるのか？	新庄警察署
9	逃げるは恥だが役に立つ～世界のことわざと文化のつながりについて～	山形県国際交流協会(オンライン)
10	廃校利用で少子高齢化から笑子光麗化へ	最上町役場
11	SHINJO BREAD COLLECTION	げたばん
12	あの揺れと爆発。最上で起こっていたらあなたは、	最上総合支庁環境課(オンライン)
13	人口減少は悪なのか？	新庄市役所総合政策課、農林課
14	コンビニの食品ロスを減らせば日本はごみに埋もれない?!	ファミリーマート
15	動物を救う道路標識！	最上総合支庁道路計画課
16	日常の運動量と長距離の伸びは関係あるのか？	山形大学(オンライン)
17	ずらりと並ぶ屋台、賑わう囃子、迫力ある山車、来年復帰なるかも?!	新庄商工会議所(オンライン)
18	もっと学校生活楽しくしよう！	新庄神室産業高校
19	現在の新庄市で馬を育てることは可能か	新庄市役所総合政策課、農林課
20	市町村ソシャゲがバズったら新庄市にメリットはあるのか？	新庄市役所商工観光課
21	新庄の雪を飲み水にして国内に送ることは可能か	新庄市役所商工観光課
22	【作ってみた】地域 PR ソングはバズるのか？	新庄市役所商工観光課
23	新しい新庄市の PR キャラクターを作りたい	雪の里情報館

STEP6 成果発表会～論文執筆

生徒たちは中間発表会における評価シートとコメント、地域の方々からのアドバイスを参考にし、より効果的かつ具体的な問題解決策について試行錯誤を続けた。また、成果発表会に向けてのプレゼンづくりと探究活動のまとめとなる論文作成を並行して行い、考察を深化させ、より精緻な見解をスライドにまとめることができた。

成果発表会は、例年であれば地域の方々や保護者、学校関係者に公開しているが、コロナ禍により発表回数を減らすなど、規模を縮小して行った。発表時間 8 分・質疑応答 2 分・リフレクションシート記入 2 分の 12 分で構成し、探究コースの地域理解発展研究 23 テーマ、一般コースの課題研究 52 テーマの研究について発表した。探究コース、一般コースともに、補足資料として写真を提示するグループがあり、それぞれの探究活動の魅力を伝える工夫が見られた発表会となった。なお、発表に対する評価はルーブリックを用いている。



最後に、山形県教育庁高校教育課・石黒吉寛指導主事より講評いただき、以下の 3 点について助言があった。

1. 興味関心からスタートしているため主体的になっている。どんな経験をしてどんな力がついたか、という過程が大事。自分の学びに活かしてほしい。
2. 学校で指定されたフォーマットがあるため整理されていてわかりやすい。ただし自分(たち)だけの理解・解釈にならないように情報の取捨選択をすること。
3. 質問する力をつけてほしい。相手の発表に興味をもっているから質問できる、という側面もある。また、質問を受けることで発表者の学びにつながることもある。

1 月からは「課題研究」に移り、個人で興味のあるテーマについて研究を始めている。

最後に、まとめとして行った評価アンケートの結果を掲載する。

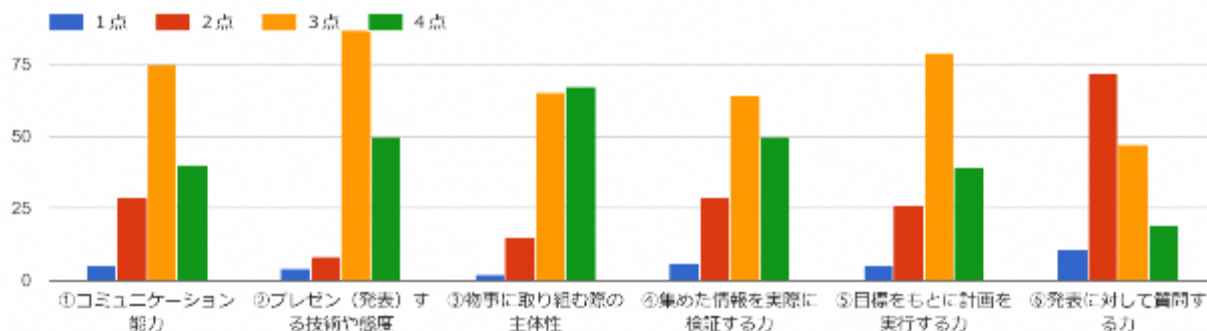
質問 1 課題研究／地域理解発展研究を通して以下の 6 つの力が身についたと思う程度を、1 点(最低)～4 点(最高)で自己評価するもの

- ①コミュニケーション能力 ②プレゼン(発表)する技術や態度 ③物事に取り組む際の主体性
④集めた情報を実際に検証する力 ⑤目標をもとに計画を実行する力 ⑥発表に対して質問する力

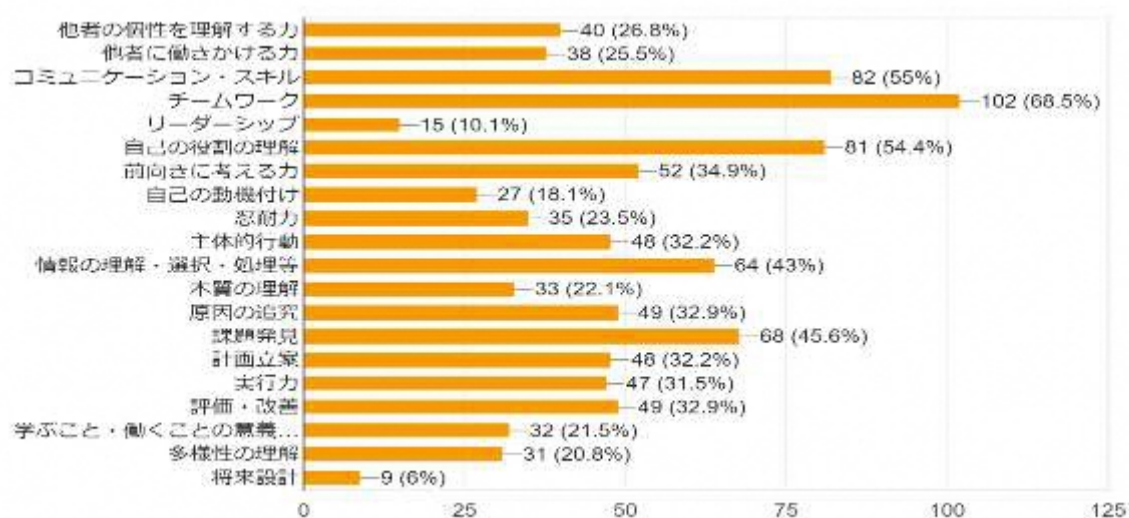
	①	②	③	④	⑤	⑥
探究コース	3.08	3.28	3.20	2.88	2.83	2.73
一般コース	2.98	3.21	3.36	3.12	3.09	2.42

(探究コース N=40、一般コース N=107)

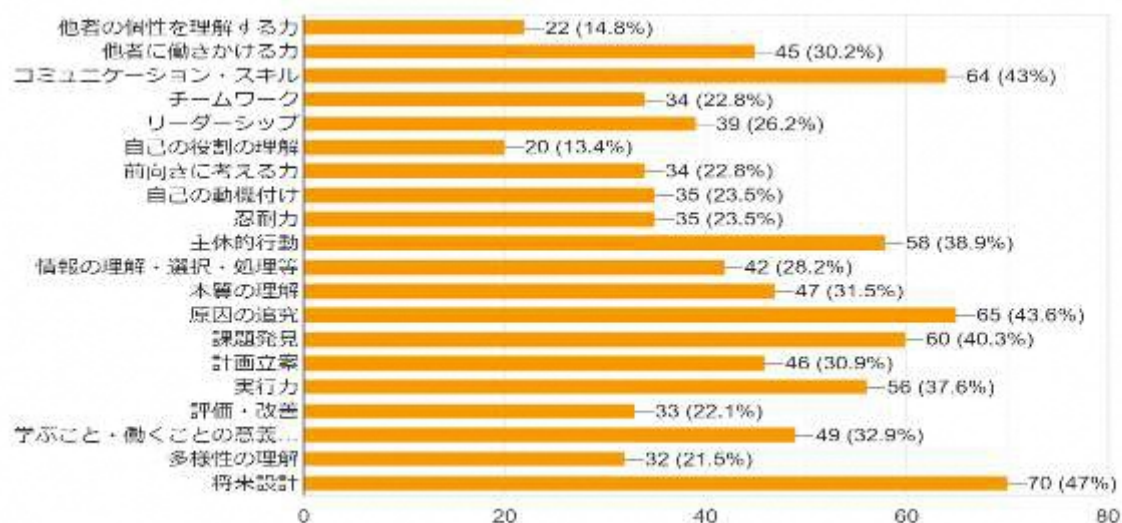
なお、探究コースと一般コースを併せた分布は次ページの通りである。全体的には⑥質問する力が課題であり、来年度の総合的な探究の時間および各教科・科目の時間で強化したい。



質問2 今年度の探究活動を通して、身についたと思う力を選択肢から選ぶもの（複数回答可）
(N=147)



質問3 来年度の探究活動を通して、身につけたいと思う力を選択肢から選ぶもの（複数回答可）
(N=147)



A-d 発表実践

「自分」をテーマに、これまで3年次の担任団が取り組んできた小論文や面接練習の実践事例をベースにしなが、複数の活動を通して自分について掘り下げたり、2年間の学びによる自己成長の確認を行わせたりすることをねらいとしている。

①1学期

一般コースは次のような内容を実施した。

4月 ～ 5月	自己PR・志望理由書・自己とポリシーのマッチング 「他者の視点に立ち、どのような自己PR・志望理由書が興味をもたれるか」を考えながら、実践をふりかえり、自己PR・志望理由書の文章を書く。まず取り組んできたことを書き出し、特に伝えたいことを3つに絞った上で、ナンバリングや具体→抽象など、これまでの総合的な探究の時間や教科の学習で学んだことの活用も意識させる。
6月	自己PR・志望理由書の再検討 自分のPRしたい点を客観視するため、志望先の3つのポリシーなどと比較した上でPRを再検証する。さらに、志望理由について問いに答える形を踏まえて文章にまとめる。「プチ面接練習」では、生徒同士が発表内容を確認し合い、発表内容や仕方の修正を行った。
6月	小論文を書いてみよう 小論文は、「自分の考えを述べる」ことが基本であり、題材には現代社会の課題点がよく取り上げられる。志望理由書で「自分と進路先」を中心に考えたところから視点を広げて「自分と社会」に目を向けることをねらいとした。

「発表実践」の「発表」は、例えば2年次の課題研究発表のようなもの(だけ)とは考えていない。むしろ、ワークごとに細かく発表の機会を設定することで、小さく探究サイクルを回すことを意図している。

また、探究コースは2年次1月から開始した課題研究に7月まで取り組んだ。

4～5月は基本的には生徒がほぼすべて各自で研究を行った。6月からはその結果をA4判2枚の論文兼ポスター形式にまとめた。論文兼ポスターとは、A3判に拡大すればそのままポスターになるような様式のことである。発表会ではA3判クリアファイルに入れ、生徒が手に持って発表する形式にした。論文とポスターを両方作る手間や、発表会の準備・片づけを省力化するためである。

発表会は7月中旬、「新北探究コース2期生 探究学習成果発表会」として、3クラス(各年次1クラスずつ)合同で実施した。3年生は1・2年生にも伝わるような説明や、ポスターが見やすくなるような工夫を考える一方、1・2年生は3年生の研究内容や態度から大きな刺激を受けていた。このように探究コースが一同に会する機会を設けることができたことは評価できる点である。

【論文兼ポスターの例】



【テーマ一覧】

紙の限界	病院食のイメージ改善
学び方によって記憶の定着に差はあるのか	アレルギーっ子も安心して楽しくご飯を食べられる環境であるか
高校生が主体の活動は大人との交流を増やすのか	真実はいつも一つなのか？
この発表を見終えたあと、絶対にピザを食べたくなる。～地元ピザの叫び～	ハニカム構造の利点
歌詞がない音楽と歌詞を知らない音楽どっちが勉強に向いてるの？	お化けはあなたの脳にいる
ドクダミの虫除けスプレーはどれくらいの効果があるのか？	性的マイノリティと関わるために知るべきこと
運動と勉強の関係性	手話を用いた会話が主流になることはあるのか
だれでもショートスリーパーになれるのか	新北はバリアフリーなのか
田舎で買い物代行サービスは経営できるか	日本人は韓国についてどう思っているのか
バイオミメティクスと生活	匿名性インターネット相談サイト in hospital
睡眠と学習の関係は？	言葉が与える印象
リスニング力は短期間で向上させることができるのか	オンライン診療について
誰でも簡単に足は速くなるのか	人間は翼で飛べるのか
体温と免疫力の関係	かしのゆきのかみ ひとあそびはなれてころねたあつさめぬいにおけずまをけ
孟子・荀子の考えは現在の道徳教育に活かすことができるのか	島根県の高校から学んで作るPR動画
集中力を高めるには？	放射線=害？
緊張する場面でも実力を発揮するにはどうしたらいいか	効果的な二度寝対策はあるのか
短期間で字はきれいになるか	狐のイメージの変遷と由来
行動科学を用いて、勉強へのとり組みを改善することは可能か	人に心を開きやすい距離感とは
	初対面の人との会話をうまくするには？

②2学期

7月からは、大まかな志望学部ごとに集まり面接練習を行った。9月からは、一般コースも探究コースも「コース別実践」を実施した。生徒各自の目標に応じて、自己PR、志望理由書、小論文、面接練習について再びワークに取り組んだ。特に、志望理由書については、自分が学びたいことができる進学先全体に目を向けさせたうえで、特に興味をもった進学先をピックアップするようにした。面接練習では、教員から指導をうける時間を確保し、練習の質を高められるように工夫した。

A-e 地域系部活動の設置

地域系部活動として「地域探究部（通称チタン）」を発足し、地域協働活動のフロントランナーとして活動している。地域探究部のみの所属も可能であるが、他の部活動との兼部も可能である。現在、2年次生の部員が5名である。

モデルとしているのは島根県津和野高校の「ブリコラージュゼミ」である。このゼミのねらいは、

- ・「今、ここにあるもの」に気づき、それを活かすこと
- ・自分に合ったやり方で社会に関わること
- ・経験したことを、言葉にして表現すること

であり、「地域探究部」でも同様のコンセプトで活動を展開している。

昨年度1月に、研究成果を新庄市長、教育長、総合政策課長へオンラインで発表する機会があり、新聞にも取り上げられた。その記事を読んだ団体から企画に関する調査協力依頼を頂いたことを皮切りに、今年度は様々な地域の方々から依頼を頂いて活動することになった。また地域協働学習実施支援員の坂本健太郎氏に外部コーチを依頼しており、昨年度2月からは個人研究での活動も始めた。



例えば、右図は今年度5月の職員研修会で事例を紹介した際のスライドである。この時点で、

- ・新庄駅併設施設「ゆめりあ」
- ・新庄市
- ・最上総合支庁農業振興課

と連携した活動がスタートしている。その後の活動については、次ページの生徒作成ポスターを参照されたい。

また「哲学カフェ」を個人研究のテーマに選んだ生徒は、オンライン環境を最大限に活用し、東京の大学生が開催している哲学カフェに参加したり、地域の大人や高校生と哲学カフェを複数回開催したりしている。回を重ねることに、自己の課題と感じていた対話する力、ファシリテーション能力などを地域の大人に認めてもらう機会が増え、自己肯定感を高めることや進路意識の向上につながっている。他の生徒も、地域の施設に見学に向かうことはもちろん、コーチのコーディネートにより海外在住の日本人の方に取材をするなど、活動の広がりを見せた。

地域から依頼を頂いての活動も増えてはいるものの、生徒が学びの主体であることを忘れずに、単なる「何でも屋」「地域の広告塔」に陥らないように留意している。また、総合的な探究の時間と同様、地域探究部の活動も生徒の興味関心をベースにしたものにシフトしている。地域“を”探究する活動だけでなく、地域“で”（自分の興味関心に関するものを）探究する活動に挑戦していく部活動として、文科省事業が終了した後も活動を継続していく。

新庄北高校 地域探究部の1年

《地域探究部とは》

「今ここにあることを生かす」「社会とのつながりを持つ」

「経験したことを言葉にして表現する」の3つを理念に掲げた部活動。
地域の方々と協力し、課題解決に取り組み、地域の活性化や新たな価値創造を目指す。

月	やったこと	内容
4月	新入生歓迎会	・新規部員獲得のため新入生歓迎会でPR
5月	山菜料理考案	・地元の山菜を使ってPR動画を作成
6月	個人研究	・個人の興味、関心をテーマに探究活動
7月	地産地消弁当メニュー考案	・地元食材を使って弁当メニューを考案
8月	地産地消弁当メニュー試作 文化祭展示	・地元食事を使って実際に料理実食 ・活動記録や個人研究、PR動画の展示
9月	コワーキングスペース調査	・ゆめりあにあるコワーキングスペースの使用状況の
10月	まちとしょステーション	・ジモト大学のプログラムへの参加
11月	県発表準備	・県発表の発表ポスター

個人研究 個人での探究活動



学んだこと

- ・計画を立て、先を見通して活動する大切さ
- ・地域にも地域のために活動している
大人が多くいること
- ・活動が制限されている中でも
できることはあること

まちとしょステーション

ジモト大学の新庄駅ゆめりあ促進事業の
イベントの準備、参加



今後の活動

マイプロジェクトアワード

→地域探究部、哲学カフェの2つでエントリー

哲学カフェの今後

→哲学に造詣の深い方をお呼びしての
高校生向け哲学カフェ

《お世話になった方々》

一般社団法人とらいあの方、市役所の方、最上総合支庁の方、
山形大学・早稲田大学・東北芸術工科大学の学生の方、ジモト大学の方

B-a 地域連携アプリの開発

地域連携活動専用の Web システム、「ジモト大学アプリ」を今年度も継続して活用した。生徒は、希望する講座を選択してアプリ上で申し込むことができ、活動後、振り返りを入力することも出来るようになっている。

昨年度の課題に、登録時にアクセスが集中して繋がらなくなったり、必要事項の失念などで登録がスムーズに進まなかったりしたことが挙げられた。それを受け今年度は、登録説明時に同時接続する人数を半分にして2回転で行い、また Web システムに関わって頂いている企業のスタッフも増員して手厚く対応できる環境を作った。それにより、今年度は大きな混乱を招かずに登録することが出来た。コロナ禍により、対面での活動をオンラインに切り替えて対応した企画も数多くあったが、生徒と地域とも繋がりを絶やすことなく、学びを継続できたことは大きな成果であった。

B-b 情報リテラシーの醸成

昨年度に続き、今年度もコロナウイルス感染症対策を行いながら、総合的な探究の時間を進めることとなった。長引くコロナ禍において、ICT の活用が「必要」から「必需」となり、強制的に意識改革が進んだと言える。

SNS や Google フォームを活用してのアンケートは一般化し、さらに、総合的な探究の時間でも Google Classroom を設け、生徒への連絡ツールとして随時活用できた。また、今年度は Google ドキュメントを利用して2年次の研究論文を作成した。生徒が作成した論文を教員と共有することで、リアルタイムで添削することが可能となり、生徒・教員ともに負担の軽減となった。さらにスマートフォンから論文の作成や修正が出来るため、コンピュータ室の混雑を軽減することもできた。その他に今年度は、iPad にスピーカーをつないで音声を公開した発表者もあり、昨年度以上に ICT 活用のバリエーションが広がった。また、生徒と教員間で、メールを通じて個別に対応することも増え、対面とは違うコミュニケーションも当たり前になった。

現在発表ツールのメインは紙で行っているが、A-a 地域理解プログラムの項で述べたように発表会を動画撮影形式で実施できたことで、可能性の広がりを感じている。来年度は一人一台端末も整備され、機器を活用した活動を今後も模索したい。



C-a アカデミック・インターンシップの取組

今年度の本事業は、ジモト大学のプログラム内における「しごとーーーク～若手従業員のリアルなおはなし～」を兼ねる形で実施した。様々な職場で働く若手社員から高校生に対して、自身の経験に基づく仕事のやりがいや暮らしについて語ってもらうことで、地域の事業所の魅力や地元で暮らすことの良さを感じてもらうとともに、様々な職業で働くイメージ喚起を図り、ひいては地元事業所への就職等促進につなげることを目的とする。

実施日時・場所

日時：令和3年7月28日（水）9:30～11:25

場所：本校

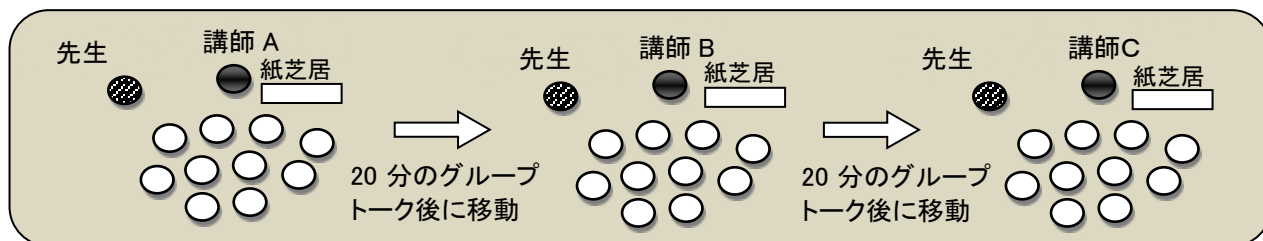
実施内容

- 内容：
- ・生徒が製造業、研究関係、建設業、サービス業、金融、公務、行政書士のなかから、聞きたいと思う仕事を選択する。
 - ・若手社員から仕事のやりがいや暮らしについて語ってもらう。（講師となる若手社員は本校の卒業生を中心とする。）
 - ・講師と生徒による意見交換。

流れ：①講師は、原則としてスケッチブックに記載した紙芝居*を用いて説明（10分）

②先輩職員との意見交換（質疑応答）（10分）

⇒①、②を3回繰り返す



※紙芝居の内容について、

- ①今の仕事の紹介、②学生時代の話、③今の仕事との出会い、仕事に就いたきっかけ
- ④仕事で大切にしている価値観・やりがい・こだわり、⑤高校生へのメッセージ

講師にはこの5項目についてスケッチブック（20枚程度）に記載いただき、当日、それをめくりながらお話をしていただいた。



C-b 研究実績の進路指導への活用

国公立大学の総合型選抜・学校推薦型選抜入試においては44名中22名の合格となった。3年次の活動で自己理解をする時間を多く設けたこともあり、面接において自分を表現することが上手くできたのではないと思われる。また試験において、総合的な探究の時間について質問されることがあり、1・2年次の研究活動を充実したものにするのができていたため、回答に興味をもっていただくことができたと考えられる。

加えて、昨年度から引き続き、私立大学も含めて総合型選抜・学校推薦型選抜入試を活用する生徒の割合は増加している。一般入試でも志望理由書等に課題研究の取り組みを記載することがあるなど、探究活動の必要性は高まっている。他校の事例も参考にさせていただきながら、研究を進めたい。

【主な総合型選抜・学校推薦型選抜合格先】

北海道教育大学、帯広畜産大学、東北大学、岩手大学、宮城教育大学、山形大学、岩手県立大学、宮城大学、山形県立保健医療大学、米沢栄養大学、東京都立大学、東北福祉大学、東北芸術工科大学、国際医療福祉大学、法政大学、駒澤大学、武蔵野大学、大谷大学など

D-a 「ふるさと科目」の開設と教材開発

昨年度に引き続き、生徒・教員双方が地域に関する知識を獲得することを目的に「ふるさと科目」の授業を行った。教科の授業で学んだことと地域とがどのように関わっているかを学んだり、外部講師を招いて実際に作る体験をしたりするなど、各教科工夫を凝らした授業が展開された。

家庭科の授業では、最上传承野菜をテーマに最上総合支庁職員から出前授業を行っていただき、最上传承野菜を広めるためにはどうしたらいいのかを考えるワークショップや地産地消メニューの考案を行った。考案した地産地消定食のメニューは総合支庁の食堂で実際に提供され、その様子はニュースでも取り上げられた。生徒は地域への理解と教科の知識を連動させ、学びを深めていった。

授業は2学期から開始される。基本的に火曜日7校時（火曜日が休日の場合はその前後）に入っており、同じ時間帯で2・3年次は総合的な探究の時間を行っている。

【各教科の授業テーマ】（国語～地歴公民は全員対象、理科～芸術は1つ選択）

教科	授業テーマ
国語	『校友会雑誌』を読む～百年前の先輩の言葉を我々はどう受け取るか～①～③
	『校友会雑誌』を読む～百年前の先輩の言葉を我々はどう受け取るか～④⑤
数学&情報	人口ピラミッド予測のデータ計算①②
	気象データのグラフ作成と考察①②
	全体の振り返り
英語	オリエンテーション
	ディスカッション①②「新庄まつりを訪れた外国人に役立つこと・もの」
	発表準備

	発表、振り返り	
地歴公民	新庄まつりより～最上地区の飢饉～	
	水資源の問題と地域、リサイクルと地域	
	道の駅から考える新庄市のまちづくり	
	民話や伝説は我々に何を残したのか？	
	新庄・最上地域ってどんなところ？	
理科	地域の市町村史を読み解く	
	金属について学ぶ①②	
	美酒県山形～酵母菌を学ぶ「アルコール発酵」実験～	
	振り返り	
保健体育	オリエンテーション、「最上地域の弱点はどこだ」体力テスト分析①②	
	「最上地区の弱点はどこだ」弱点改善メニューの考察①②	
	振り返り	
家庭科	新庄亀綾織について学ぶ	
	伝承野菜について学ぶ（出前講座）	
	地産地消定食メニュー考案①②	
	地産地消定食メニュー試食会、振り返り	
芸術 (音楽・ 美術合同)	テーマ：「指首野川 めぐる プロデュース大作戦」	
	コンセプト発表・各部門本格的制作開始	
	カメラテスト・通し稽古・リハーサル	
	撮影会	
	お披露目会準備、お披露目会本番	

【ワークシートの例】を次ページから掲載。

D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」の開設

「ジモト大学」プロジェクト、「ユネスコ向け異文化遺産新庄まつり」などの地域活動を、学校外における学修として単位認定する学校設定科目「My エリア・ラーニング」を新たに開設した。しかし、今年度も新型コロナウイルス感染症予防の為、各地で祭りや催し物が中止となり、運用することが出来なかった。

ふるさと探究【ワークシート例①】〈国語科〉

ふるさと探究(国語科) 第二回 11/2(火) 7校時

『校友会雑誌』を読む 〈百年前の先輩のことを我々はどう受け取るか〉

() 班 一年() 組 () 番 氏名()

前回の復習

- 1 我々が母校、新庄北高校は今年で121歳(周年)になります。
- 2 新庄北高校が生まれた年は明治33年、西暦1900年です。
- 3 新北生徒会誌「北畑(えん)」 ◎新庄中学校「校友会雑誌」

本日の課題『国語便覧から見える明治時代』

P274 『物価と株値』 ・国立大学の授業料、明治45年代と現在の金額は？

[]

P275 『学校制度』 ・明治33年当時の中学校は何歳から何歳？

[]

P280 『近現代文学中年表』

- ・日清戦争、日露戦争はそれぞれ何年に起こった？

[]

- ・新庄中学校開校の明治33年から、この紀年号が出された明治47年までに発行された有名な、又はあなたの知っている、読んだことのある文学作品を数点挙げてみよう

[]

P288 『近現代時代背景 明治』

- ・四民平等とは？
- ↑明治政府の開明化を主張するスローガン。従来の士農工商の身分差別を廃し、1870年平民の苗字許可、1871年平民と華族・士族間との通婚を許し、1872年学制を制定して国民皆学を布告し、職業や移住の自由を認めるなど封建的身分制による差別を廃し、国民すべてが平等であるとした。しかし、皇族・華族・士族・平民などの階級と、それに伴う差別意識は長く残った。(百科事典マイペディアより)
- ・日清戦争、日露戦争の勝利は日本に何をもちたらし、それ以降の日本にどんな影響を及ぼしたと思いますか？

[]

P290 『明治の文学』

- ・写実主義とは、 []
- ・現文一致体とは、 []
- ・浪漫主義とは、 []
- ・自然主義とは、 []

本日のふるさと探究を終えての感想を書いてください。

[]

ふるさと探究【ワークシート例②】〈英語科〉

ふるさと探究（英語）ワークシート① ～グループメンバーとデザインするものを決定しよう～

Task 1 Write down the name of your group members.

Class	No.	Name	No.	Name	No.	Name

タスク2 B6④「新庄まつりを訪れた外国人が困りそうなことは？」で出たアイデアを日本語で書き出せる。

•

•

•

•

タスク4 B8②「新庄まつりを訪れた外国人が困らぬから嬉しいもの・ことは？」で出たアイデアを日本語で書き出そう。

•

•

•

•

Task 3 Using the expressions below, translate the ideas you got in Task 2 into English..

Ex) It would be difficult for foreigners to understand what each float shows.
Foreigners might have difficulty understanding what each float shows.

•

•

•

•

•

•

Task 5 Using the expressions below, translate the ideas you got in Task 4 into English.

Ex) A pictogram for a restroom would help foreigners to find one .
Foreigners might be helped if there were a pictogram for a restroom.

•

•

•

•

•

•

指首野川 めぐる プロデュース大作戦☆ エントリーシート

1年 組 ()

- | | |
|------------------------|-------------------|
| ①●総監督 (1) | ⑩●脚本 (2) |
| ②●助監督 (1) | ⑪テーマソング制作 (2) |
| ③●指首野川 めぐる (1) | ⑫振付担当 (2) |
| ④●マネージャー (1) | ⑬ポスター制作 |
| ⑤メイク (2) | ⑭CD制作 (2) |
| ⑥ヘアースタylist (1) | ⑮親衛隊 (掛け声・振り) (5) |
| ⑦スタイリスト (2) | ⑯押しグッズ制作 (4) |
| ⑧●カメラマン (写真・ビデオ編集) (3) | ⑰会計 (1) |
| ⑨ 音響・録音 (2) | |

1. 上記①～⑰の役割の中から自分が希望する番号を選び、志望理由を書くこと。

(第1・第2志望とも書く)

なお、志望理由は「自分はこれができる・この技術に自信があるからこの仕事をしたい!」といった熱意をもって記入すること。

「めぐるが君に何をしてくれるか待っている者は去れ!

君がめぐるに何ができるかを見せろ!」

第1志望	番号 ()
志望理由	

第2志望	番号 ()
志望理由	

2. 君が持っている、このプロジェクトに対するアイデアを記入せよ

--

【年間スケジュール】

月 日	曜	校 時	1年1組	1年2組	1年3組	1年4組
7 / 27	火	1	社会① @葛陵会館			
7 / 28	水	1	英語① @葛陵会館			
		2	英語② @葛陵会館			
8 / 31	火	7	英語③	英語③	英語③	英語③
9 / 7	火	7	英語④	英語④	英語④	英語④
9 / 14	火	7	英語⑤	英語⑤	英語⑤	英語⑤
9 / 21	火	7	社会② @葛陵会館			
10 / 5	火	7	社会③ @葛陵会館			
10 / 12	火	7	社会④ @葛陵会館			
10 / 19	火	7	社会⑤ @葛陵会館			
10 / 21	木	4	地域理解プログラム⑥⑦⑧ @体育館			
		5				
		6				
10 / 26	火	7	国語①	国語①	数学&情報①	数学&情報①
11 / 2	火	7	国語②	国語②	数学&情報②	数学&情報②
11 / 9	火	7	国語③	国語③	数学&情報③	数学&情報③
11 / 16	火	7	国語④	国語④	数学&情報④	数学&情報④
12 / 7	火	7	国語⑤	国語⑤	数学&情報⑤	数学&情報⑤
12 / 8	水	4	2年探究型学習成果発表会 @体育館			
		5				
		6				
12 / 14	火	7	数学&情報①	数学&情報①	国語①	国語①
12 / 21	火	7	数学&情報②	数学&情報②	国語②	国語②
12 / 24	金	3	数学&情報③	数学&情報③	国語③	国語③
1 / 11	火	7	数学&情報④	数学&情報④	国語④	国語④
1 / 18	火	7	数学&情報⑤	数学&情報⑤	国語⑤	国語⑤
2 / 3	木	5	地域理解プログラム成果発表会			
		6				
1 / 25	火	7	1教科選択 芸術:音楽・美術で各20名 保健体育:最大2クラス80名 家庭科:最大1クラス40名 理科:最大2クラス80名			
2 / 1	火	7				
2 / 8	火	7				
2 / 15	火	7				
3 / 3	木	6				

第3部 生徒の変容と次年度以降に向けて

1 目標の進捗状況、成果、評価及び次年度以降への接続

仮説A「地域と密着した探究型学習」に係る仮説

- ①地域と密着した探究型学習を通し、地域の課題解決につながる実践を積むことで、地域に対する愛着が生まれ、地域に戻りたいと考える生徒が増加する。
- ②地域の課題解決につながる実践を積むことで、課題解決能力の高い生徒を育成できる。

【進捗状況】計画通りに実施できた。課題解決型から可能性発見型へ移行した3年間で、生徒がより主体的にプログラムに取り組んでいることが実感された。

【成果及び評価】評価指標の調査による、「地域の大人との関わりが、考えを大きく変えると思う」「自分の生活と地域の活動が関係していると思う」などの項目で、事業前と比べて肯定的な割合が増え、地域や外部の大人と関わるのが自身の成長に繋がると捉えている生徒の割合が増加していることが伺える。一方で地域に戻りたいと考える生徒の割合には大きな変化はない。

【課題及び改善点】文科省事業は終了するが、「LINKプロジェクト」の名称は残し、令和4年度以降も継続して実施することが決定している。

仮説B「ICT機器の活用」に係る仮説

- ①地域連携アプリを利用することで、地域連携の取組をより効果的に進めることができる。
- ②ICT機器を地域における探究活動に活用することで、将来の情報活用能力につながる情報機器を活用する能力、プレゼンテーション能力を含むコミュニケーション能力を育成することができる。

【進捗状況】ジモト大学 Web システムは、今年度も継続して運用できた。また令和2年度から県で導入された Google Workspace for Education を引き続き活用した。さらにオンライン会議システムによる外部の方へのプレゼンテーション、新型コロナウイルス感染症予防によりポスターセッションを中止して生徒による発表動画撮影・編集会を行うなど、生徒のスキル向上によって計画を超えた取り組みができています。

【成果及び評価】評価指標の「地域連携アプリの利用回数（一人あたり）」については全員が登録しており目標を満たしている。また生徒のスライド作成や論文執筆・添削・提出を電子データで行い生徒・教員相互の負担削減に努めたり、発表動画をお互いに参観して評価したりするなど新しい学びの機会を設定できた。

【課題及び改善点】令和4年度は1人1台端末が導入される。特に総合的な探究の時間の授業について、「本時のねらい」やワークシートを集約した校内ポータルサイトのような活用を検討している。

仮説C「新しいキャリア教育」に係る仮説

- ①地元企業との連携を強化したキャリア教育により、上級学校卒業後に地域に戻りたいと考える生徒の割合が増加する。
- ②ポートフォリオを活用することで地域における探究活動を活用して進学する生徒の割合が増加する。

【進捗状況】2年次のアカデミックインターンシップは、ジモト大学と連携して7月に実施した。また、1年次のトークフォークダンスは昨年度と同じ規模で実施できた。生徒の活動の記録は

校内で蓄積しているが、3年間で状況の変化もあり外部のポートフォリオサイトは活用できていない。

【成果及び評価】「興味を持った地域企業がある」という項目の数値は大きな変化はない。これは3年間を経る中で、地元企業のみ限定させるのではなく、より広いキャリア全般に目を向けさせる指導へと移行したことも要因であると考えられる。研究実績を活用して総合型選抜・学校推薦型選抜による進学者数は昨年度並みである。ただし、指標の基準を満たさない程度ではあるものの志望理由や面接などに活かした生徒の割合は多く、昨年度よりも進路実績に手ごたえを感じている。

【課題及び改善点】探究学習とキャリアをつなげる取り組みは今後も継続していく。

仮説D「教育課程の開発」に係る仮説

- ①地域の題材を扱った授業を受けることで、総合的な学習の時間における探究型学習をより内容の濃いものにできる。教科横断的な科目を受講することで地域の現状や課題を広い視点で捉えることができるようになる。
- ②地域の題材に関する調査研究を行うことで、教員自身の地域に対する愛着が強くなる。調査研究を通して教員の指導力が向上する。
- ③学校外における学修として単位認定することで、地域における活動を活性化できる。

【進捗状況】「ふるさと探究」は年間指導計画通りに実施した。「My エリア・ラーニング」はコロナ禍により地域行事等が縮小になった影響で単位を修得する生徒はいなかった。

【成果及び評価】「ふるさと探究」全体ではほとんどの生徒が高い評価であった。1月以降に実施した科目では地域の方を講師に迎えて授業を行うなど、「社会に開かれた教育課程」の先取りを意識している。

【課題及び改善点】「ふるさと探究」は令和4年度は教育課程の変更による時期の変更などはあるが、ほぼ今年度と同様に実施する予定である。また「ふるさと科目」として特化するだけでなく、日々の授業内容を地域題材に落とし込む授業展開も検討したい。地域活動が縮小される中で「My エリア・ラーニング」の運用方法も今後の課題である。

次ページの目標設定シートについて：

コロナ禍による影響等により、計画当初に想定していた数値や計算式では対応できないものがあった。以下に補足説明を述べる。

- 1. 本構想について実現する成果目標の設定（アウトカム）
- 1-a 外部評価者による評価を想定していたが、令和2年度、3年度とも成果発表会に外部評価者を招くことができなかったため、生徒の相互評価での数値としている。
- 1-c 令和2年度は分母（ジモト大学参加者数）が小さくなったため、割合が大きくなっている。

目標設定シート

ふりがな	やまがたけんりつしんじょうきたこうとうがっこう	指定期間	2019～ 2021
学校名	山形県立新庄北高等学校		

2021年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 成果発表会においてルーブリックの最高評価を受ける生徒の割合						50 単位：％ (2021年度)
a	本事業対象生徒：		40	56.1	45.5	
	本事業対象生徒以外：		—	—	—	
目標設定の考え方：課題解決能力・コミュニケーション力などを研究成果で評価する。審査員の地域住民が強く共感できる発表を半数以上にする(現在の審査員は外部者は一部で生徒が主であることから2018年数値はなし)						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 将来地元での就業を希望する生徒の割合						60 単位：％ (2021年度)
b	本事業対象生徒：		—	22.7	31.2	
	本事業対象生徒以外：	30	—	—	—	
目標設定の考え方：上級学校進学する生徒で地元回帰の意識を持つ生徒を現状の2倍にする。						
(その他本構想における取組の達成目標) 生徒の主体的な地域活動への参画率(ジモト大学参画者に対する割合、他校も含む割合)						10 単位：％ (2021年)
c	本事業対象生徒：		11.4	33.6	11	
	本事業対象生徒以外：	ごく少数	3	—	—	
目標設定の考え方：地域提供の講座への参加に止まらず、自分から行動する生徒を増加させる。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a-1	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) (1, 3と共通する指標の「成果発表会においてルーブリックの最高評価を受ける生徒の割合」 「将来地元での就業を希望する割合」は1で記載。 「地域課題研究又は発展的な実践に協働する地域の外部人材の参画状況」は3で記載。)					単位:
目標設定の考え方:						
a-2	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) ジモト大学における参加者数(推進校のみ)					250 単位:名 (2021年度)
		165	260	33	348	
目標設定の考え方: 課外単位認定等により100名の増加を目指す。						
a-3	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 生徒の主體的な地域活動への参画率(ジモト大学参画者に対する割合、推進校のみ)					20 単位:% (2021年)
		ごく少数	23	55	19.4	
目標設定の考え方: 地域提供の講座への参加に止まらず、自分から行動する生徒を増加させる。生徒の動きが地域にも見える20%(50名)程度の活動を目指す。						
a-4	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 学校外における学修として単位認定する人数					5 単位:名 (2021年度)
		0	0	0	0	
目標設定の考え方: 積極的に活動する先導役の生徒(将来のコーディネーター)を育成。最低1週間程度の活動が必要であることから特に積極的な5名程度の認定を見込んでいる。						
a-5	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 興味ある地元企業があると答える生徒の割合					50 単位:% (2021年度)
		データなし	-	26.5	12.7	
目標設定の考え方: 地元回帰のため、地元の企業についての知識を持たせ、半数以上の生徒に意識する企業を持って卒業させる。						
a-6	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 研究授業の実施回数					30 単位:回 (2021年度)
		10	18	16	11	
目標設定の考え方: 研究成果への外部の普及を図るために必要。						
a-7	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の題材を扱った授業の回数(総合的な学習の時間は除く)					100 単位:回 (2021年度)
		10	20	99	103	
目標設定の考え方: ふるさと探究開講で地域の題材を横断的に扱う機会を大幅に増加させる。						
a-8	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) ポートフォリオ、研究実績を活用した総合型選抜・学校推薦型選抜による進学者数					10 単位:名 (2021年度)
		ほとんどなし	1	5	5	
目標設定の考え方: 上級学校でも地域連携に取り組める生徒を増加させる						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) ジモトサミットの開催回数					1 単位:回 (2019年度)
		0	1	1	1	
目標設定の考え方: 地域住民と直接対話し、意見を吸い上げる経験を積ませる						
c	(その他本構想における取組の具体的指標) ジモト連携アプリの活用回数(一人あたり)					1 単位:回 (2021年度)
		0	1.3	1.1	1.2	
目標設定の考え方: 普及を図り、地域連携に対する主催者側・生徒側のハードルを低くする						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）							
		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a -1	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コンソーシアムの構成団体数			22	22	22	25 単位:団体 (2021年度)
			20	-	-	-	
目標設定の考え方:企業など事業に賛同する裾野を拡大していく。自治体・商工会はすでに所属することから企業単体での参画等を見込む。							
a -2	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域課題研究又は発展的な実践に協働する地域の外部人材の参画状況			499	542	533	650 単位:名 (2021年度)
			450	-	-	-	
目標設定の考え方:事業に賛同する裾野を拡大していく。現状に対して200名の増加を見込む。							
a -3	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コンソーシアムの活動回数			4	3	5	9 単位:回 (2021年度)
			4	-	-	-	
目標設定の考え方:コンソーシアムのプロジェクトチームによる支援が本格化する2年目に回数増を見込む。							
b	(その他本構想における取組の具体的指標) ジモト大学における高校1学年分の参加者数(他校を含む全体数)			540	587	908	700 単位:名 (2021年度)
			418	-	-	-	
目標設定の考え方:地区内の高校生(約700名)が必ず1回は参加できる体制を確保する。							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数(人)	521	527	524	524	503
本事業対象生徒数			524	524	503
本事業対象外生徒数			0	0	0

令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット 発表スライド
2022(令和4)年1月20日

事業の目的

- 地域の未来を切り開く思いと能力を持った『人材』を育成する
- ① 探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材
- ② 地域に誇りをもち、社会や地域とつながる
- ③ Selfie(自己)に繋がる地域社会の中でAIやデータの方を最大限活用し貢献して地域を牽引していく人材
- 長期的には：地域に人材が溢る「新たな人の流れ」を作り出す
- 地域に誇れること・誇ってくること「だけ」の想定ではない
- この地域でも、他の地域に出ても、必要となる力は同じ

評価アンケートから（1年次の2月に実施）

- 地域の本人との関わりが、考えを大きく変えると思う。
- 自分の生活と地域の活動が関係していると思う。

項目	10/23	11/13	12/13	1/13
関わり	83	82	83	82
関係性	83	82	83	82

事業が終わっても、活動を継続するために

- 0～1年目：広げる→2～3年目：つなげる
- 1年目の準備と地域の協力で、2年目はコロナ禍でも8割方の活動
- 3年目は、事業終了後の継続を見届けた連携へ（関係分限の強化、プロジェクトチームの再編）
- 校内については、大がかりのものより真似しやすいもの
- この3年間は、布石（固事の準備）という意識で完成形ではなく、段階進捗する必要があります

事業の進め方

事業の進め方：① 計画・準備、② 実施、③ 評価・振り返り。各段階で具体的な活動や関係者の役割が示されています。

特色①の例 総合的な探究の時間（1年次）

- 探究スキルトレーニング（1学期）個人活動
- 地域課題プログラム（2・3学期）グループ活動

探究活動の具体的な内容や成果のイメージが示されています。

協働体制の広がり

- 事業の他の活動
- 地域系部活動「地域探究部」
- 学校指定科目「ふるさと探究」
- 進化した活動・周知
- 県外高校の連携研修会の開催
- 地域の中学校の地学の授業連携
- 近隣の小学校への訪問
- 県内大学生との交流

地域魅力化型「新庄・最上LINKプロジェクト」

- 山形県立新庄北高等学校
- 創立は1900年
- 基幹校として地域のリーダーを育成
- 常連科5クラス（一般4、探究1）
- 定時制、最上校キャンパス
- 最上地域
- 1町4町3村
- 地域内に大学、短大なし
- 地域課題の先進地
- 地域と学校との危機感の共有

事業の特色

- ①課題解決型から、地域の可能性発見型へ移行
- ②地域との連携体制

事業の特色と体制に関する詳細な説明が記載されています。

特色②の例 地域との協働体制

- 新庄・最上ジモト大学(2017～)
- 県の認知機関、最上総合支庁を核として
- 最上地域8市町村がそれぞれの特性を生かし、高校生に地元の魅力を経験できるプログラムを実施
- 「一般社団法人とらいらいお」との協働（協働型協働体制）
- 年々発展：高校生自ら企画運営するプログラム創出、2020～オンライン講座の開始、2021～新しく参加する市 など

年度	2018	2019	2020	2021
参加校	12	21	32	36
参加人数	244	411	540	608

発表の概要

発表時間が15分と限られていたため、特色を絞って発表した。

【事業の特色①】可能性発見型の課題研究

第2部 A-a 地域理解プログラムの項で述べた内容を中心に説明を行った。具体的なグループを取り上げて紹介し、また他グループのテーマも身近なことから考えを広げていることや、大きくなりすぎず扱いやすいテーマになっていることを説明した。



紹介した、あるグループの例

- ・夏休みにフィールドワークに出かけ、商店街の写真を撮影した。
- ・そこから、シャッターが閉まっている店が思っていた以上に多いことがわかった。
- ・商店街を盛り上げるための方法としてシャッターアートはどうか、というアイデアを考えた。
- ・そのアイデアを、トークフォークダンスで、10月に地域の方に発表をした。
- ・地域の方からのアドバイスとして、企画ターゲットの明確化や自分たちと地域住民の Win-Win を目指すこと、統一感を出すこと、などを頂き、改めてアイデアを焦点化した。
- ・最終的に、ジモト大学でシャッターアートづくりができないか、というアイデアにまとめた。

【事業の特色②】地域との協働体制

第2部 A-b ジモト大学の項で述べた内容を中心に、特に官民学の連携体制になっている（県の現地機関である最上総合支庁および新庄市立図書館などの指定管理者団体である一般社団法人とらいあとの連携）ことを取り上げた。全国的には学校が所在する市町村との連携が多く、県の現地機関との連携する例は少ないと伺ったことがある。利点としては、例えば市内だけでなく県内の企業や専門機関と連携しやすくなること、同じような地域課題は近隣市町村と共同で対応した方が合理的であること、何より生徒は市外からも通学してきており、「地域」と一口に言っても所在する市に留まらないこと、などが挙げられる。

【総括と今後の展開】

3か年事業ながらも、特に2・3年目は終わった後のことを想定して動いていた。校内の取り組みについては大々的なものより小規模であった方が持続でき、また他校も真似しやすいのではないかと考えている。この3年間はあくまでも布石の段階と捉え、事業が終わっても取捨選択をした上で、生徒に資する取り組みになるよう進めていくことを伝えた。

2 生徒の変容と地域の期待

【1 年次生徒】

「この地域には何もない」という印象を、多くの生徒は持っている。1 年間では難しいかもしれないが、少しずつでもその印象を払拭することは必要であると考え。第 2 部 A-a 地域理解プログラムの項で述べたように、そのきっかけのひとつとして「地域について本気で考えている大人と対等に話ができる」ことを目標に活動している。1 年間の振り返り（2 月に実施）の中で、「自分の考え方が、地域理解プログラムのスタート前とどう変化したか」という項目への生徒の回答を紹介する（一部の回答は意図が変わらない程度に抜粋した）。

○地域に対しての変化

- ・自分たちの地域には特徴があまりないと思っていたが、このプログラムを通して自分達が気づけなかった特徴やたくさんの長所を見つけることができ、物事を計画する力がつき、道筋を立てることができるようになった。
- ・地域には何もないなとか思ってたけど、探してないだけで、結構あったりするんだなって思った。自分が好きな地元にするには、自分が行動するしかないんだと思い知った。
- ・地元の企業など全然知らなかったが、地域理解プログラムをすることで知ることができたし、地元での就職も良いのではないかと考えるようになった。
- ・短所の裏側には必ず長所も伴っていて、無いものを見つめるのではなく、今あるものをどうより良くしていくかを考えていくことが大切だと分かった。
- ・地元を出たい思いがより一層強まった。
- ・スタート前は新庄市って何も魅力ないな一って思っていたが、案の定魅力はなくて地元から離れないと思いつく自分にはなれないなという思いが強くなった。

○探究活動に対しての変化

- ・地域を活性化させるということを考えるのは正直面倒だなと思っていたけれど、グループで課題を考え、どうしたら活性化に繋がられるかを考えたり、地域の大人の方の前で発表したりしてきて、地域の為に役に立つような活動をしたりすることにより興味を持ったし、楽しいと思った。
- ・初めはこの活動は正直無意味だと思っていたが、活動をしていくにつれてコミュニケーション能力だったり他者の個性の理解だったり身についたことが沢山あった。
- ・地域理解プログラムがあまり面白くなさそうなイメージだったけど、実際やってみると楽しくて、メンバーと一緒に地域の課題について何が原因なのか突き止めたり、調べたりするのが楽しかった。
- ・地域の課題解決を大人がすれば良いと思っていたが、実際に地域の課題と向き合ってみて高校生である自分たちだからこそできることがあることを知り、主体的に課題解決に取り組もうと思えた。

○資質・能力等の変化

- ・4月時点では、先生方から出された課題に対して答えを見つけることが多かった。しかし、今は自分達で課題を見つけ、それに対する自分たちなりの解決策、対策やこの地域でどんな事がしたいか、またそれを実現させるためにはどうしたら良いのかを考えることができるようになった。
- ・前は、考えていることが曖昧のまま提案や発表をしていることが多かったけど、授業内で発表した後に指摘をもらうことで最終的により具体的な発表ができるようになった。1人で考えるよりもグループで考えた方が意見が深まることがわかった。
- ・現実的な面から考えることの大切さがより理解できた。企画したとして、それがどこにどう影響するのか細かく考えていくことでさらに理解が深まるので、計画し実行し考えることその重要性が分かった。
- ・最初はとにかく他の班が思いつかないことをしようとしていたけど、内容が現実的なものでは無くなってしまっていたので内容を逆算して考えることが大切だと分かり現実的な内容につくり直せた。

ここまでの説明で述べたことの繰り返しになるが、従来の「課題解決型」は大人から「降ってくる」地域課題を高校生なりに考えるものであった。地域課題について学ぶこと自体は否定しないが、高校生が考える解決策は「大人まかせ」になりがちであり、かつそれらは大人も考えている策であることもあり、厳しい意見を頂くこともあった。そもそも、このような与えられた課題について考えることは総合的な学習の時間の内容であり、総合的な探究の時間の趣旨からは外れている。

そこで本事業の目標である「地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』」に立ち返って考え、地域理解プログラムでは「地域について本気で考えている大人と対等に話ができる」生徒像が浮かび上がった。地域課題から考え始めるのではなく、まず自分達が地域で「やってみたいこと・できること」から考え始め、それが結果的に地域課題の解決に繋がればいい、という方向性への転換である。「自分たちはこう考えていて、ここまでできる。だから、ここの部分は地域の大人にサポートをお願いしたい」という提案の形にすることで、生徒たちは「自分ごと」として考えることができた。

総合的な探究の時間について、「生徒が主体的に取り組もうとしない。どのような取り組みをすればいいか」というご質問を、この2年間で何度か伺った。これに対しては

- ・最初から多くを求めすぎない。
- ・やっているうちにわかることがあるから、まず取り組ませてみる。
- ・最初に目標や趣旨は伝えるものの、その後何度も伝えていく。

のように回答させて頂いている。

【2年次生徒】

探究コースの取り組みは第2部 A-c 地域理解発展研究の項で述べた。フィールドワークにおいて、校外の団体や人材との結びつきを構築することができている。特に、フィールドワークⅢの効果が大きい。フィールドワークⅢは、校内中間発表会の内容を地域の方や専門家に発表し、フィードバックを頂くことがねらいである

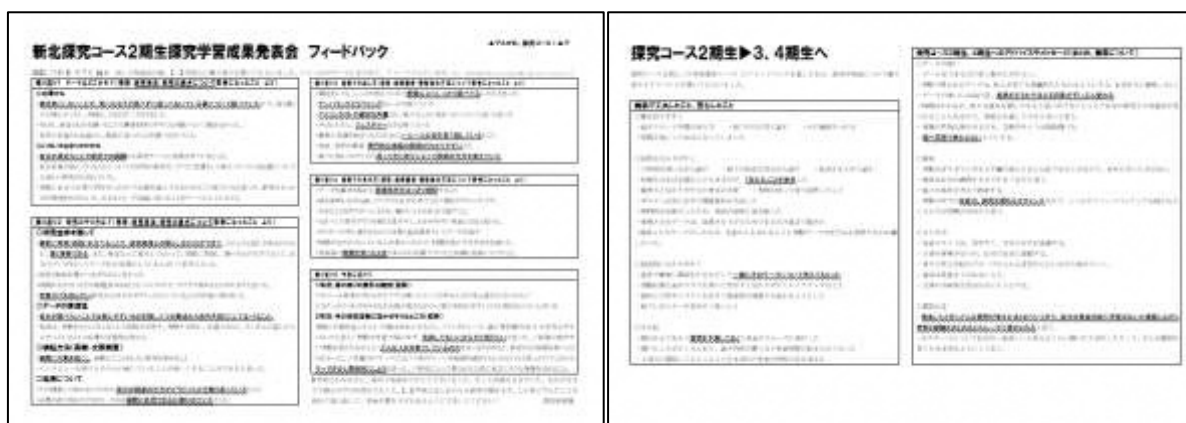
このような「複数回の取り組み」が、生徒の成長に寄与すると考えている。例えば中間発表会（10月）から成果発表会（12月）の流れや、成果発表会の中で複数回発表を行うことが挙げられる。さらに昨年度から、仮説の検証を1次検証、2次検証の二段階を基本にした。

また、一般コースの生徒の中にも変化は見られている。昨年度以来、地域で何らかの活動を起こしたいと考えている生徒、学校枠を超えて地域で活動をする生徒は増えている。第2部 A-b「ジモト大学」プロジェクトの項でも活動を紹介したが、そうした校外のプログラムに参加する高校生は年々増加している。コンソーシアム発信の企画ではない以上、こうした生徒の数をすべて把握することはできず、本事業の目標指数には含まれないが、数値に現れない活動や土壌が醸成されていると考えられる。

【3年次生徒】

第2部 A-c 発表実践の項で述べた探究コースの課題研究では、39テーマ4テーマが地域に関するものであった。昨年度よりも割合は減ったものの、一方で本人の進路志望に関係する研究テーマが増加している。生徒の主体的な取り組みにつながり、ほとんどの生徒が教員の手助けなく一人で研究を進めていた。

また、発表会は1・2・3年次の探究コース合同で行った。1・2年次生の感想を3年次生に伝え、3年次生からも1・2年次生に研究のアドバイスを書いてもらった。このような縦のつながりも今後継続して大事にしていきたい。



1・2年生から3年生へ

3年生から1・2年生へ

【地域の支援】

高校生の変容には地域の大人たちの考え方の変化が影響していると考えられる。高校生を対象とした地元企業の説明会は従来から行われてきたが、この数年の説明会を見てみると、企業の関係者が一方的に求める人材や業務内容を説明する形式ではなくなっている。多数の企業から人を集め、高校生とグルーピングして座談会形式での説明と高校生からの質問に答える形式が主流になっている。

また各自治体の広報誌でも高校生の活躍が紹介されるようになった。新庄市の広報誌『広報 しんじょう』の巻末では地元企業の若手社員と高校生の対話が掲載されるようになり、高校生の広報誌への注目度が高まっている。なお第2部 A-e の項目で紹介した地域探究部も、モニターとして高校生視点の意見を提出している。

さらに第2部 A-b 「ジモト大学」プロジェクトや、第3部「1 目標の進捗状況、成果、評価及び次年度以降への接続」の繰り返しになるが、地域の協力体制が非常に強力である。新庄・最上地域の地域づくりは、大人が主導する地域づくりではなく、高校生と協働する地域づくりへと変化してきている。各学校における地域学習の成果を発揮する場が、自治体や企業によって確保されていることで生徒の成長はさらに促されている。

【他校とのつながり】

今年度は地区内の中学校2校から依頼があり、それぞれ3年生（6月と12月の2回）、1年生（11月）の総合的な学習の時間の講師を本校の担当者が務めた。いずれの授業も中学校の先生方が参観し、職員研修も兼ねる形で行われた。

	主な依頼内容
3年生 6月	課題づくりや調査活動のポイント
3年生 12月	まとめ方のアドバイス
1年生 11月	探究するとは／課題づくりや調査活動のポイント／今後の積み重ね

また芸術科の1年次生の授業では、近隣の小学校との交流を行っている。心を明るく豊かにする芸術の力を体感することをねらいとしており、今年度は県内でのコロナ禍の状況を慎重に確認しながら11月に実施した。また同小学校の6年生から本校の3年次生に向けて受験応援メッセージが贈られ、後日お返しに卒業祝いメッセージを贈るなど、交流の輪が広がっている。

さらに今年度からジモト大学コンソーシアムに加わった尾花沢市にある北村山高校より、実践の寄稿を頂いた。次ページに掲載する。



山形新聞 2021年11月14日

北村山高校の取り組みについて～LINKプロジェクトの拡大～

令和3年度より新庄・最上ジモト大学のキャンパスが尾花沢市まで拡大された。これにより、尾花沢市に位置する県立北村山高等学校の生徒も新庄・最上地域の生徒と同様に、地域体験型の学びに取り組むことができるようになった。

令和3年度は北村山高等学校生活総合系列の生徒たちによる「そばガールズ」が講座の主体となり、蕎麦を活用したスイーツづくりなどで活躍してくれた他、徳良湖におけるヨット体験も行われている。後者は北村山高等学校の学校設定教科である「地域考究」における生徒の研究活動が基になっており、自分たちの学びが形にする経験を得た。

また、新庄北高等学校の「新庄・最上LINKプロジェクト」の実践事例を参考とし、10月に北村山高校でも地域の企業の方を招き、1年次生徒との対話を実施した。企業の方からは「これまでになく、高校生と親密に接することができた。」という声もいただいております、生徒からは「大人とこんなにたくさん話したのは初めてだった。」といった感想が出ている。地域にとっても学校にとっても非常に有意義な取り組みであり、高校生の地域理解と進路意識の醸成を同時に深めることができた。

12月には尾花沢市役所職員による「まちづくりワークショップ」が1年次生を対象に実施された。「環境」と「まちづくり」の2つのグループに分かれ、高校生の意見を市役所の方に伝える内容であったが、「まちづくり」に対する高校生の見方・考え方が大いに参考になったという。

1年次生は次年度より先述の「地域考究」に取り組む。今年度繰り返した地域との対話の経験が学びに役立つことは確実であり、ジモト大学では豊富な地域知識を活用して主体的な学びの姿勢を見せてくれると期待できる。

このように、地域と協働した学びは新庄北高等学校を起点とし、周辺の学校及び地域に確実に拡大、充実化している。



地域企業との交流①



地域企業との交流②



尾花沢市によるワークショップ



「地域考究」 ヨット体験



「そばガールズ」の活躍

隣県の宮城県佐沼高等学校からは職員研修会で本校の1年次のプログラムを体験したいとのご依頼を頂き、9月に訪問して実施した。本校の1年次生と同様に、事前に「佐沼高校の日常（生徒編）」をテーマにした写真を撮影して頂き、それを元にしてワークを行った。また振り返りのワークではご依頼の趣旨に基き、出されたアイデアそのものよりも、体験して得られた気づきや工夫



に（生徒目線として）焦点を当ててふりかえって頂くことも工夫した。さらに12月には生徒会の生徒が来校し、生徒同士の交流や1年次の総合的な探究の時間の見学も行われた。

このような活動を通して本校の実践が周知されるのはもちろん、準備や運営の段階で改めて実践を振り返る機会が得られたことも収穫であった。来年度以降も、依頼を頂くことがあれば協力したいと考えている一方、講師として派遣できる人材を増やすことが課題である。

【次年度に向けて】

文科省事業としての「新庄・最上 LINK プロジェクト」は今年度で終了するが、「LINK プロジェクト」の名称は残して地域協働の事業は継続していく。右図は2022年2月21日に事業の総括として行った職員研修会での資料である。「一部を継続」と記載しているが、必ずしも地域に関連せずに継続するものも含めれば、ほとんどの事業は継続して実施する計画である。このことの要因としては前述の



通り、2年前から終わった後のことを想定して、今年度も来年度に継続できる規模で実施していたことが挙げられる。一方で、来年度以降への課題も多い。職員研修会でも新教育課程に向けた一定の準備は整っているものの、特に資質・能力の部分について改めて確認し、授業等で意識していく必要性を述べた。

2021年(令和3年)3月には、山形県教育委員会から、最上地区の県立高校再編整備計画<第2次計画>が策定された。2026年(令和8年)に、新庄北高校と新庄南高校の普通科が新庄新高校(仮称)となる計画である。これによって新庄市内にある公立高校の普通科は1校になる。これまで以上に多様な生徒に対応する取り組みが必要とされ、地域社会と連携した活動は一層重要度を増すと考えられる。新高校への具体的な動きは来年度から始まっていくが、本事業をはじめとした地域活動を通して、今のうちから学校枠を超えた取り組みを広げていくことは有効であると考えられる。